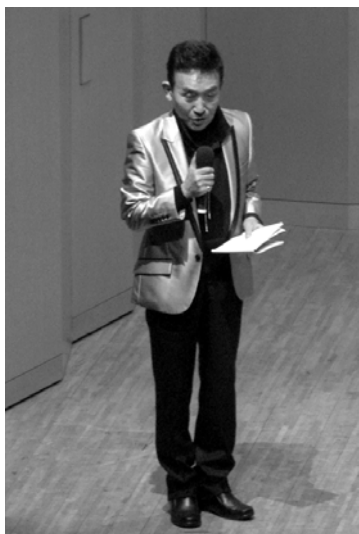


ピアノ部会 太田 恵美子 〒182-0033 調布市富士見町 3-3-34 Tel/Fax(042)482-4818	声楽部会 笠原 たか 〒524-0012 守山市播磨田町 1456-1 Tel (077)514-0005/Fax (077)514-0036
賛助会員 現代邦楽(箏) 菊地 悌子 〒157-0071 世田谷区千歳台 1-24-1 Tel/Fax(03)3483-0583	理事 弦楽部会 北川 靖子 〒165-0027 中野区野方4-38-8 Tel/Fax(03)3385-3284
理事 財務局長/機関誌出版部長 作曲部会 橘川 琢 〒108-0073 港区三田 4-11-14-103 Phone(090)2312-5620	理事 ピアノ部会 栗栖 麻衣子 〒366-0051 深谷市上柴町東2-1-7 武田様方 Tel /Fax(048)572-0125
ピアノ部会 小崎 幸子 〒207-0014 東大和市南街1-33-9 Tel /Fax(042) 564-3673	理事 Website編集長 作曲部会 小西 徹郎 〒365-0057 鴻巣市幸町 3 - 5 Tel/Fax (048)543-4956
声楽部会 小室 由美子 〒251-0876 藤沢市善行坂1-21-37 Tel (0466)81-1147	声楽部会 佐藤 光政 〒143-0023 大田区山王 2-1-8-822 Tel/Fax(03)3776-6566
声楽部会 芝田 貞子 〒162-0052 新宿区戸山 1-18-6 Tel/Fax(03) 3209-9666	声楽部会 嶋田 美佐子 〒277-0863 柏市豊四季 643-25 Tel (04)7175-4731 /Fax(04) 7175-4755
賛助会員 作曲・ピアノ 島 筒 英 夫 〒184-0013 小金井市前原町 3-10-5 Tel (042)381-0932	理事 事務局長 オーディオ 高島 和義 〒344-0023 春日部市大枝 360-1-427 Tel/Fax(048)734-1829

声楽部会 高 橋 順 子 〒157-0073 世田谷区砧8-28-3 Tel /Fax(03) 6411-8322	理事 出版局長 楽譜出版部長 作曲部会 高 橋 雅 光 〒351-0111和光市下新倉5-14-10クリオ西高島平 壺番館305 Tel/Fax (048)465-8229
理事 機関誌副編集長 作曲部会 高 橋 通 〒357-0041 飯能市美杉台5-11-25 Tel/Fax (042)971-0503	ピアノ部会 田 中 俊 子 〒211-0067 川崎市中原区今井上町 54 ガーデンテ ィアラ武蔵小杉407 Tel/Fax (044)572-9418
邦楽部会 生田流箏曲 高 橋 澄 子 〒357-0041 飯能市美杉台5-11-25 Tel/Fax (042)971-0503	副理事長 ピアノ部会 戸 引 小 夜 子 〒164-0013 中野区弥生町 5-9-2 Tel/Fax(03)3381-6691
理事 相談役 機関誌編集長 作曲 中 島 洋 一 〒190-0031 立川市砂川町 5-36-3 Tel/Fax(042)535-3294	理事 ピアノ部会 並 木 桂 子 〒176-0023 練馬区中村北2-2-13-301 Phone(080)3003-2102 Fax(03)5241-8847
ピアノ部会 原 口 摩 純 〒225-0002 横浜市青葉区美しが丘 2-31-20 城様方 Tel (045) 902-4959	理事 ピアノ部会 八王子音楽院 広 瀬 美 紀 子 〒192-0046 八王子市明神町 2-23-10 Tel/Fax(042)656-2395
理事 公演局長 作曲部会 北 條 直 彦 〒157-0066 世田谷区成城 3-5-6 Tel/Fax(03)3417-1947	ピアノ部会 山 下 早 苗 〒104-0051 中央区佃2-1-1-1306 Tel / Fax (03)5547-3130
研究・評論 機関誌副編集長 湯 浅 玲 子 〒166-0004 杉並区阿佐谷南1-39-12 Tel/Fax(03)3315-0632 URL:http://www.ac.auone-net.jp/~reiko-y/	声楽部会 吉 仲 京 子 〒113-0032 文京区弥生1-2-9 Tel /Fax(03) 3813-1471

若い翼による CMDJ コンサート 6 (前半)



司会役の佐藤光政



① 「キャンディード」を歌う浅田容子／伴奏：上埜マユミ



② ショパンを弾く寒河江真弓



③ ヘンデルを歌う山下美樹／伴奏：山木千絵



④ クーツィールの「金管五重奏曲」Op. 6 を演奏するメンバー：左より、小林菜由(Tp.)
金澤佳都(Hr.)、若松将正(Tuba)、中村博道(Tbn.)、松本加穂(Tp.)

若い翼による CMDJ コンサート 6 (後半)



⑤ リストを弾く小崎麻美



⑥ ベッリーニを歌う高松久美子／伴奏：山木千絵



⑦ プロコフィエフを弾く成田真衣子



⑧ サンサーンスを演奏する木下昌人／伴奏：安宅薫



開演前の記念写真 前列左から3人目：実行委員長の戸引小夜子／4人目：司会の佐藤光政

音楽の世界

目 次

グラビア	若い翼による CMDJ コンサート 6		3-4
論壇	新しい年を迎えて	北川 暁子	6
特集	歌は世につれ ～私の歌謡曲史（上）		8
	座談会 （助川敏弥・佐藤光政・橘川琢）		
リレー連載	未来の音楽人へ（10）	菊地 悌子	20
海外リポート	2013 スイス・ヴェルビエ音楽祭	草野 明子	26
コンサート評	ピアノとヴァイオリンとチェロのタベ	浅岡 弘和	31
連載			
	歌の道・我が音楽人生（1） --新連載--	久住祐実男	32
	音・雑記一ひなの里通信一（64）	狭間 壮	34
	名曲喫茶の片隅から（45）	宮本 英世	36
	音 盤 奇 譚（50）	板倉 重雄	38
	電子楽器レポート・連載-12		
	【ハイブリッドオーケストラの現状紹介（1）】	阿方 俊	40
	福島日記（25）	小西 徹郎	42
	明日の歌を～楽友邂逅点（第9回） 渡辺宙明-4	橘川 琢	44
コンクールレポート	第38回全国尺八コンクール見聞録	高橋 雅光	48
	CMDJ 会と会員の情報		49
	★新年会のご案内		51

2014年の新しい年を迎えました。それだけで気持ちが改まり、清々しく晴れやかに感じるのはちょっと不思議な気がします。何か飛躍が出来るような雰囲気になります。皆様にとってさらに佳い年になりますように。

私にとっては理事長として初めての新年であります。また新参者で、皆様のお手伝いはおろか足手纏いになっているのでは、と恐れながら、ない知恵を絞って勤めさせて頂いております。私のピアノ公開演奏歴では今年がちょうど50年、半世紀という訳ですが、アッという間であったようにも思えます。1964年1月（大学1年生でした）それまで師事しておりましたコハンスキー先生の命令（？）でデビューリサイタルを行いました。現在では殆んどコンサートに使われなくなった内幸町のイイノホールで、ベートーヴェンの「テレゼ」やブラームスのパガニーニ変奏曲（2巻共）などを弾いたように憶えています。以後、自主リサイタルは毎年行い、時には連続演奏の形を取り忙しい年もありました。自主リサイタルでは自分がその時に興味をもって弾きたい曲しか取り上げませんでした。結果的には古典からロマン派、近・現代までおしなべて網羅したようになりました。演奏と並行しての指導の立場になったのは、大学卒業直後からの留学を終えて帰国してから始まりましたので、演奏開始に遅れること7年です。

東京のみならずいくつかの地方都市でも教えることとなり、さまざまな例を体験出来ました。日本の音楽事情はどうなっているのか、どうすればより良くなるのか、私なりに感じ考え、試行錯誤しながら今日に至っております。

私の勉学時代の鮮明な記憶は小学5年から11年お世話になったコハンスキー先生の立派な体格です。レッスンは厳しく、日頃のんびりとししか練習をしない私でもさすがに緊張したものです。ドイツ語でのレッスンでしたので（父が通訳。高校生からは一人で通いました）、細かいことは面倒だったのでしょう。あまりおっしゃいませんでしたが、その分自分で考えて作って行かねばなりません。いくら厳しいといっても、感情的に怒られることは一切ありませんでした。当時としては珍しい曲もたくさん与えて下さり、父は楽譜を船便で輸入して貰うのに大変だったようです。でもおかげで、フランス、ロシアの曲等、抵抗なく楽しめました。

ウィーンでのハウザー先生はそれとまるで反対に、細かく説明して下さい方で、指遣いからペダルから和音の音量コントロールまで、何故そうしなければならない

かをはっきり理論的に説明されました。曲の構造や背景まで一応理解していないと意味のないレッスンでしたが、よく納得出来ました。日本に戻ってからはひとりで勉強せざるを得ませんでした。作曲家とよく付き合うつもりでそのスタイルを探って行く作業はとても楽しいものです。傑作と云われるクラス作品はどんな時代のどんな作品でも、尽きぬ魅力を秘めているものです。

自分も勉強を続けつつ、若い人達を教えることは、更に得るところがあります。何故、そう弾くのか、の理由を捜すことは興味深いものです。身近の生徒やコンクール出場者などの演奏から感じることは、曲の内容は適当にしてもっぱら指を達者に動かすことに神経を使っているらしいという傾向です。指は必要以上なほどよく動き、でも音色は単調、又はペダルの使い方が悪く音が不鮮明。フレーズ感やブレスは呼吸に関係なく指任せ。それでは指の運動のオリンピックでしかありません。21世紀に生きる我々が百年も二百年も前の作品と対峙する訳ですが、そこには時代を超えて何か共感出来るものがある筈です。それを解明するには社会の歴史、宗教や気候風土までかかわって来ます。音楽そのものも、西洋音楽は下（低音）が土台であり、倍音の力もあって上（メロディー）が自由に振舞うのが基本です。リズムは強拍弱拍がはっきりしています。踊りに由来する曲も沢山あります。この強弱のずれたものがシンコペーションで、アウフタクトは強拍におまけの付いた状態です。和音の考え方や扱い方も時代と共に変遷していますからその理解も必要です。教える立場のひとはそうした楽譜の読み方をこそ伝えるべきであって、その上での歌い方は本人に任せる（というか、強制できない）しかないと思います。深い意味での作曲家の意図や精神に辿り着く為の手伝いが教師の役目であろうと思います。

私は今年、又久しぶりにどっぷりショパンに浸って(3回のコンサートに分けて)、未だ私の知らないショパンの一面でも探し当てられたら、と楽しみにしております。

(きたがわ あきこ：本会 理事長)

A decorative horizontal border at the bottom of the page featuring a repeating sequence of green five-pointed stars and plus signs.

12月号の訂正

P51 の曲目解説

モーツァルト：ピアノ・トリオ D dur K. 548 【誤】

↓

モーツァルト：ピアノ・トリオ G dur K. 548 【正】

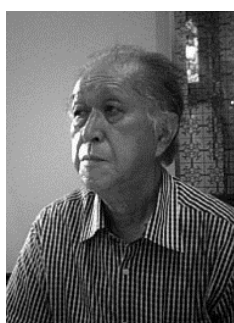
なお、P48 のプログラムでは正しく表記されています。

「歌は世につれ ～私の歌謡曲史」（上）

「歌は世につれ、世は歌につれ」、また、「人は世につれ、世は歌につれ」などというが、特に歌謡曲と文化は、そして時代は密接なつながりがある。今回、日本音楽舞踊会議会員で作曲家、代表理事の助川敏弥、クラシック音楽と歌謡曲両方で活躍をする声楽の佐藤光政の両氏から、戦後からのそれぞれの体験談に基づく貴重なお話を伺った。

芸術音楽を中心に扱っている本誌だからこそ持ちえる、歌謡曲、大衆音楽へのまなざしで、生きた歴史を誌面で語り継ぎたいと思う。

（聞き手・編集：橘川琢・本誌副編集長）



【助川敏弥プロフィール】

1930 年生。東京芸術大学作曲科卒業。芸大在学中、日本音楽コンクール第一位と特賞、1960 年度文部省芸術祭奨励賞、1971 年度文化庁芸術祭優秀賞、1973 年度イタリア放送協会主催国際放送作品コンクール「イタリア賞」（NHK 参加）大賞。1976 年から 1994 年まで日本現代音楽協会委員。日本音楽舞踊会議機関誌月刊『音楽の世界』元編集長、2008 年より日本音楽舞踊会議代表理事。



【佐藤光政プロフィール】

1942 年生まれ。東京藝術大学音楽学部卒業。第 42 回日本音楽コンクール声楽部門第 1 位受賞。クラシック音楽の分野のみならずポピュラー音楽の分野にも活動を開始。様々な音楽を最高の演奏で聴かせるエンターテイナー、幅広いレパートリー、熱唱するステージには定評がある。CBS ソニー、ビクター、音楽センターより、LP、EP、CD 合わせて 20 数枚を発売。近年はオペラの舞台にも情熱を燃やしている。第 18 回ジローオペラ賞受賞。磯谷威、大槻秀元、柴田睦陸、河本喜助の

諸氏に師事。現在二期会、日本音楽舞踊会議、日本オペラ協会の各会員。



【橘川琢プロフィール】

1974 年生まれ。作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。第 60 回文化庁芸術祭参加。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》（Aura-J）が採択される。過去に音楽療法の現場で高齢者の施設での実践を通じ、多くの歌とエピソードを学ぶ。日本音楽舞踊会議理事。月刊『音楽の世界』副編集長。

■ 現場へ出るまで・・・佐藤光政

助川：佐藤さんは芸大を卒業されたのはいつですか？

佐藤：昭和 41 年ですね。

助川：芸大と言えば、戦後の芸大は学則が厳しかったですよ。教授用のピアノに触れただけで停学処分です。私も 1 週間の停学処分を受けました。

佐藤：僕も始末書を書きました。2 年のときに慰問演奏に行ったのね。松本の少年刑務所とかに。そうしたら、施設の方から学校にお礼状が届いてバレてしまって。

助川：私が一年の時、学校当局が、「学外のアルバイトを全面的に禁止する」という内規を出しました。当時は学外のアルバイトで学費を稼いでいた学生が多かった時代です。政治に関心ない音楽学生でもこれは大騒ぎになりました。奏楽堂に集まってああでもないこうでもない議論している中で、ある作曲科の学生が「内規の返上」という決議案を出して、これが可決され前代未聞の結果になりました。新聞にものりましたよ。その学生が林光君でした。その結果、学校側は内規を取り下げるということになりました。あの当時、キャバレーや米軍キャンプが主な職場で、黛（敏郎）さんもよく米軍キャンプにピアノを弾きに行っていた。そんな時代です。佐藤さんは、米軍キャンプには？

佐藤：僕も米軍キャンプには歌いに行っていました。将校のオフィシャルクラブ、将校は奥さん同伴の場所で、それに対して GI は何とも雑多な感がありましたね。芸大の同級生 4 人と組んで回ってきたけれど、ついたあだ名が「全学連コーラス」っていうの。卒業して、二期会に入って研究生を 1 年で辞めた頃でした。とても忙しい時期でした。

■佐藤光政　　生い立ちと修行時代、忘れられない歌

助川：佐藤さんはクラシックに限らずこういうような大衆音楽を手がけている珍しい人。非常に広域の活躍をしているので、こういう話が出るのは貴重だと思うので、これもまた『音楽の世界』という雑誌の持つ特徴、既成の分野にとらわれない、ものの見方をするという貴重な話になると思います。

　　どういう角度からの話にするか色々と考えたけれど、歌謡曲というのは社会との関連、因果、結び付きがとても強く、多岐多層にわたっているからそれだけ話の進めかたが難しい。社会状況、生活状況、時代状況、あとは政治、過去には戦争と、多岐多面のものが入って来る。どこから触れてよいか判らなくなってくる。10 年くらいかけて話しても終わらないかもしれない(笑)。だから、佐藤さんなり、私なり、個人で、自分の人生経験で一番印象の強かった歌の話から初めて、そこから広めてゆきましょう。

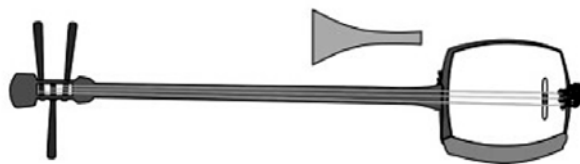
佐藤：はい、よろしく。

助川：私は、1930 年、昭和 5 年生まれ。日中戦争がはじまった昭和 12 年に小学校に入りました。あの頃は、昭和 12 年に、朝日新聞社の飛行機「神風号」がロンドンまで往復、対抗して昭和 15 年、毎日新聞社の「ニッポン号」が世界一周をしました。日本の国力が急成長している時代でしたね。小学校四年の時に太平洋戦争が始まり、終戦の時は中学三年、農村にかり出されている時に太平洋戦争が終ったという次第です。佐藤さんの年代は戦争の事は、直接は知らないですか？

佐藤：僕は昭和 17 年生まれ。物心がついたのは戦後でして。ただ B29 が飛んできて、家の前の工場が火を上げたとか、そのあたりはおぼろげに覚えています。

助川：今まで生きてきた過程で、大衆音楽との最初の接点というのはどんな形だったのですか？

佐藤：僕は家が浪曲の家庭で、浪花節や三味線の響きの中で育ちました。姉もテイチクとかに入っていて、もう一人の姉も浪曲師に。そんな家庭でしたから僕も自然に、中学卒業したら演歌歌手になるつもりでした。しかし高校に行ったら、先生が急に「君は、クラシックをはじめなさい」と。高校の先生が、武蔵野の先生を紹介してくれて、さらに月謝まで払ってくれて。それで、芸大に行く事に。



卒業して、クラシックはフランス歌曲のデュパルクが好きになって。でも、やればやるほど「僕にはまだ早い」と感じていて。若い頃はね、歌で飯を食っていこうと決意していたんです。二期会も研究生になったけれどもすぐに辞めて。とにかく「飯を食える歌を歌おう」が大切なテーマだった。

橘川：歌で食べていこうと決意したのはいつぐらいだったのですか？

佐藤：これはもうずっとね。20 歳を過ぎてからは特に。

助川：学校に行く頃までに聞いていた歌は？

佐藤：三橋美智也や、春日八郎ですね。演歌には憧れました。「別れの一本杉(昭和 30 年＝以下 S30 表記・・・日本の歌のみ表記)」ですとか、「リンゴ村から(S31)」とか。あとラジオで色々聞きました。あの頃ラジオだから歌手の顔が見えなかったの、テレビで初めて顔を拝見して、新鮮でしたね。

芸大を卒業したとき、友達と、「今出来る歌をやろう!」、そして「生活出来る歌」を。たまたま日本テレビの菊池さんという方が事務所を立ち上げて、島田祐子さんをメインに据えてやらないかと。メインは労音(勤労者音楽協議会)回り。あとは男四人でキャバレー回り。日本中、札幌から四国、キャバレーを。歌って身につけなきゃと。芸大を出たから、とにかく食べてゆこうと現場へ。それから米軍のキャンプ廻りなどでしょうか。

助川：米軍キャンプはどこへ？

佐藤：立川とか横須賀とか、あちらの方。

助川：キャンプでは洋風なものはどうでした？「テネシーワルツ」とかですか？

佐藤：そうです。そういうのもやりました。当然ながらそこでは「サイドバイサイド」だとか輸入物のスタンダードな歌がメイン。ところが地方のキャバレーに行く時は、お客様からのリクエストは「旅笠道中（S10）」とかの股旅もの。そんなこんなで23-26歳まで、とにかくめっちゃくちゃ忙しかった。

そこでクラシックの勉強も又したいと思い、足を洗わせてもらって、それから銀座とか新宿とか弾き語りの仕事に移って生活しながら、柴田睦陸（むつむ）先生のところへ行って、コンコーネを3曲、それこそ2-3年くらいかけながら叩き込まれて・・・コンコーネをですよ！？学校を出てから。

それが終わったら、コンクールを受ける事を許されて、毎コン（毎日新聞音楽コンクール。現日本音楽コンクール）受けたら一位になりました。でもそれからも、まだ研究しようと思って。僕はクラシックは大好きだけれど、本当に歌えるようになってくるのは、20代30代では無理で、40代かもしれないと感じていました。30代はラブソングを歌おうと。

ちょうどその頃、ラテンバンドの戸田義明さんのグループと出逢い、また「うたごえ（うたごえ運動系）」とかの仕事が多かったので、それからの七、八年はラテンの名曲など、例えば「ラ・マラゲーニャ」とか革命ソングの「ベンセレモス」（ヴィクトル・ハラ曲）等を、歌いまくってましたね。レコーディングなどずい分しました。

矢沢寛（故人・元日本音楽舞踊会議事務局長）さんに誘われて、日本音楽舞踊会議に入ったのも、その頃です。

助川：それは昭和で言うといつ頃？

佐藤：30代ですから、昭和51、2年の頃でした。

助川：というと、1976年か77年頃ですか。ちょうど、「60年安保騒動」が終って、「東京オリンピック」が64年にあって、それからまた10年たって、「高度経済成長時代」全盛、サラリーマンの給料がどんどん上がっていた時ですね。

佐藤：そういう時代だからか、あの頃の赤坂のクラブなんか、一流のバンドが入ってましたね。コパカバーナとかゴールデン月世界とか・・・。

■助川・・・忘れられない歌、イントロ、お客との「間」

助川：私はね、忘れられない歌といえば、「勘太郎月夜唄(S18)」ですよ。映画「伊那の勘太郎」の主題歌です。昭和18年の映画と歌です。終戦の年、田んぼにかり

出されて農家に3ヶ月泊まり込みに行っていました。毎日、草取りで泥田に入って歌っていましたね。歌は登場から2年くらいかけて広まって行ったんですね。最近、ビクターから小畑実のCDをもらってまた聞いてますよ。

戦後、つよく記憶していることは、ディック・ミネが、戦時中、西洋風の名前はいかんというので、「三根耕一」と名前を変えて活動をさせられていた。そこへ進駐軍が入ってきて、彼氏、ラジオで英語の歌をべらべら歌い始めた。「ダイナ(S9)」とか、アドリブで凄いことを言っていたよ。戦時中の圧力に対してざまあみろと言う気分だったのでしょうね。

佐藤：そうでしたか。

助川：佐藤さんの大人になりかけた頃というのは、洋風のものがどんどん入ってきて、日本風の歌謡曲というのは追いつめられていたんじゃないですか。昔の歌では「愛染かつら」という映画があって主題歌とともに一世を風靡しましたね。

佐藤：「愛染かつら」・・・「旅の夜風(S13)」の頃は生まれていませんでしたが、歌はよく歌いますね。あの頃の歌は、みんなイントロから覚えて歌っていましたね。

橘川：音楽療法の現場で、高齢者の施設で昔の歌を歌うとき、そこが重要でした。皆様、イントロで覚えていらっしゃる事が多かったです。イントロが文字通り歌の記憶のしおりのようでもありました。

助川：そう、小沢昭一さんの本にも書いてあるね。「ちょっとイントロから歌わせて下さい、イントロから歌わないと始まりません」って。

佐藤：弾き語りでバイトしていた頃ね、お客さんはきっちとイントロから弾かないとダメなんだよね。そして、いちいち楽譜をめくったら、お客様は帰っちゃう。しらけちゃう。

いかにお客さんの集中力を切らせないかというのは大切な事で、思い出す事がありますね。渡辺弘とスターダスターズというバンドがありましてね。そこで赤坂のキャバレー「ゴールデン月世界」で仕事をしたときにも学んだけれど、ダンスのときに歌う訳なんですけど、歌っているうちに、「Mの5」とかいって、知らせが回ってくる訳ですよ。歌いながら、パーッとページをめくる。音楽を途切れさせてはいけない。3秒空けたらお客様はフロアからテーブルに戻ってしまう。シビアな世界でした。

橘川：なるほど。生きた舞台ならではの、絶妙な間ですね。

佐藤：それくらいお客さんも多かったし、フロアーにも活気もあった。この時代によかったのは、特にこういう場所に、一流の腕の人たちが集まっていたという事。



ペレス・プラードとか、ジョージ・チャキリス。そりゃあもう、勉強になりますよ。自分の出番が無い時でも行って聴いたりね。

香港チェーン、ホノルルチェーン、とか、月世界チェーン、とかあって、そこをぐるぐる回れる訳ですね。一カ所じゃない。でもやっぱり地方によって違う。

■ 古賀政男と器乐的作曲

助川：歌謡界、作曲家の大物として古賀政男さんがいますね。僕が知って感心したのは、「丘を越えて(S6)」という曲、あの曲は、はじめは歌じゃなかったそうですね。器楽曲だったそうです。古賀さんは、学生時代、明治大学のマンドリンクラブにいたんですが、当時、「向ヶ丘遊園」にクラブの学友たちとハイキングに行って、そこでインスピレーションを得て作ったんだそうです。マンドリンの曲だったんでしょう。その後で、詩人に頼んで旋律に当てはめて歌詞を作ってもらったそうです。だから詩句の長さがみんなバラバラですよ。日本人で、しかも、歌で知られた古賀さんが器楽曲で発想したということは面白い。

古賀さんの歌で、戦前の「東京ラブソディ(S11)」、あの辺は明るいけれど、「影を慕いて(S7)」とか、古賀さんの歌には、暗いタイプの歌と、洋風の明るい歌と、両方あるんですね。古賀さん自身は、「僕の歌がはやっている間は日本はダメだ」と言っていたそうです。それは暗い方の種類の歌を指していたのでしょうか。



(上) 向ヶ丘遊園の一風景 (1967 年)

(下) 助川敏弥／向ヶ丘遊園・観覧車の中 (1967 年・写真撮影：松村禎三)



佐藤：みんな言っている事です、或る意味、中山晋平から古賀政男まで、日本人の血液みたいなもので。メロディラインとか。

僕も明大のマンドリンクラブはずいぶんお手伝いさせてもらったけれど。今気がついたけれど、古賀さんは明大のマンドリンクラブとかを教えていたから、こういう転調とかが自然に出てきたのかな。転調すると器乐的に映える。マンドリンクラブの為に書かれたと思えば、ああそうかと思う。

橘川：そうですね、作曲でいえば、旋律の作り方が歌の発想とはまた違う、器楽の発想もあったのかもしれませんがね。器楽ならではの発想も。もしかしたらマンド

リンでメロディを考えることも出来たから、あの独特の、ふるえるような声に合うメロディが生まれやすかったのかな、なんて思ってしまう。

助川：そうだね。古賀さんの中には、器樂的なものを含めてモダンで近代的な感性があったんでしょね。だけど、要請されてか、わりに陰気なものを作ると流行るという状況があったんだろうなあ。

橘川：暗い歌の方が、しっとり、すんなり心に入ってくるようで聞きやすい？

佐藤：だからあれは、古賀さんはそっちなのでしょうね。古賀メロディというと、大体マイナーなメロディ。

助川：橘川君は「東京ラブソディ」は知っている？途中から短調から長調へ変わる。あの辺りの技法は転調とっていいのかな。mol1 から Dur へ。

橘川：はい、「楽し都…」のところですね。

助川：反対の場合もある。「勘太郎月夜歌」は途中から mol1 へいく。ああいうのは転調とまでは言わないのかな。それにしても、古賀さんというと、庶民的なイメージだけれど、歌の中に、案外インテリ的な要素が入っている。やはりあの人は巨星ですねえ。

■「銀座」という歌枕

助川：古賀さんの歌を聞いていると、「銀座」という言葉が多く出てくる。いまの新都心の、「新宿」、「池袋」というのは出てこない。あの頃は盛り場といえは「銀座」だったんでしょね。

佐藤：銀座といえば、昨日の新聞を見ていたらね、「銀ブラ」というのは、銀座をブラブラするという意味ではなかったんだよね。「ブラ」というのは珈琲のブランドだったそうで。まだ当時はハイカラなものだったので、それを飲みに行くというのが、語源だったそう。贅沢品だったんですね。

そういえば、並木通りの街路樹は、あそこだけはみんな菩提樹だそうですよ。銀座といえば柳のイメージがあるけれど。

助川：「銀座」というのは、やはり色々なゆかりと歴史があるんだねえ。しかし今では、フランク永井の「有楽町で逢いましょう(S32)」も今日的感覚ではどこかぴたりとはいかないような気がしますね。あれからまた時代が変わっていますね。

橘川：作詞家の阿久悠さん風に言えば、ずいぶん「歌枕」というのが変わってきているのではないのでしょうか。東京一つをとってみましても、昔から銀座というのが



特に特別な場所だったのが、そこから広がってきて有楽町、六本木、新宿。いたるところに出来てきました。

流行歌のひとつとして現在の J-POP、その発信地まで見ましたら、現代では秋葉原から AKB48 やアニメソングなどが広がってきて・・・一昔前までは予想もつかなかったところからムーブメントが起きています。

助川：そうすると、抽象化されてきて、どこどこという地名が感じられなくなっちゃうかもしれないね。

橘川：多くの人に語る、多くの人の代弁をしてくれる、場所も限定しないものに。

助川：「銀座」といっていた頃、東京も一つの街、というより「町」town だったのが、それがマルチタウン、都市、City になって、どこが中心だか判らなくなった。外国の人も増えた。そういう意味では国際的になったのでしょうかね。

■歌謡曲の変遷　・・・大衆化の中で

助川：作曲技術の角度からみて注目することは、日本の大衆歌曲で、和音が表現手段の一部になっている歌というのは戦前には私の知るところでは存在しない。戦後の歌、「銀座カンカン娘(S24)」が最初ですよ。「誰を待つのか」の所で平行短調のドミナンテが出る。あれは「テネシーワルツ(S27／日本語版)」に出てくる手法です。「テネシー」より「カンカン」の方が多分先だと思う。「カンカン娘」は服部良一さんの作ですが外国歌の模倣ではないと思いますよ。

戦前は、コンチネンタルタンゴも、Dur（長調）から moll（短調）へ行ったりしていたが、それくらいのものでしたね。そういう意味で、「テネシーワルツ」と「カンカン娘」は音楽史的?に貴重な文献ですよ。この両曲がたまたま同じ時代に生まれたというのは、人の感性がある時代状況の中で同じような動きをするということなのかな。面白い現象ですね。アメリカものでは、「テネシーワルツ」のあと、「涙のワルツ」なんかがやはりパティ・ペイジの歌ではやった。

アメリカ大衆音楽は、ロックになるまでは、ヨーロッパ音楽の流れを継いでいましたね。叙情的、情緒的な歌が多かった。その中で、バート・バカラックという人が登場して、いままでのような情緒が全くない「乾いた」フシを作りだした。「雨にぬれても」とか。「アルフィー」とか、この人は日本にも来ました。歌の時代の転換期を作った人です。よしあしは別にして。

佐藤：僕らの頃はポール・アンカのファンでね。ダイアナとか。ずいぶんヒットを飛ばして。

助川：その、今のロック主導の最近の大衆音楽、佐藤さんはどう思います？

佐藤：やっぱり、ぼくらは、・・・メロディが欲しいねえ。特にクラシック人間だからさ。美しくないとなあ。

助川：判りやすいからといって、大衆化ということでどんどん下の方へと行って、難しいものを全部ほろぼしてしまったのか。でもね、一番下までいっちゃったら、いずれはまた上等なものがまた欲しくなるのが人間ではないかな。低い所まで下がって、このままでいいという人と、やっぱり、もうちょっと上等なものがほしいという人と。両方出てくると思うね。その場合の「上等なもの」は昔のものと同じではないでしょうが。

橘川：日本ではやっているものといえば、90年代、2000年代であっても昔ながらの曲、作曲技法というものが常にベースに残っている気がします。今から見れば一昔前ですが「世界に一つだけの花(平成14年)」とか至るところで歌われ演奏されましたが、あの中ではこう、作曲技法から言ったら昔ながらのもので変わった事をしている訳ではないけれど自然と歌われる。伴奏無しでは歌えないような、派手に見えるものは、私の知る限りでは残念ながらあまり歌われなくなっているし、一人で口ずさんで歌えるような昔ながらの穏健な書法のもので残っています。姿形を変えながらも、大切なところは世を、代を継がれている。

助川：昔ながらのものがまったく消えることは無いでしょうね。

音楽現代

2014年1月号 定価 1050円

♪特集＝世界の指揮者とオーケストラの現在
～注目の指揮者たち～世界の主要オーケストラ・歌劇場シェフ・リスト付き

♪特別企画＝リッカルド・ムーティ、ヴェルディのオペラを語る

♪特別企画＝2014年に来日する演奏家たち
(巻末来日演奏家一覧付き)

♪カラー口絵

- ・日生劇場開場 50 周年記念《特別公演》／二期会創立 60 周年記念公演／読売日本交響楽団創立 50 周年記念事業 A・ライマン「リア」
- ・藤沢市民会館開館 45 周年／藤沢市民オペラ創立 40 周年記念 W. A. モーツァルト「フィガロの結婚」
- ・ソフィア王妃芸術宮殿「ヴァレンシア・オペラ」開幕
- ・関西二期会第 79 回オペラ公演 W. A. モーツァルト「魔笛」
- ♪インタビュー＝木村俊光、中澤きみ子、藤井一興、現田茂夫、若林顕、アレクサンドラ・スム、光岡暁恵、佐藤美晴、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMY ビル 3F

芸術現代社 Tel.3861-2159

<http://takumishop.jp/geigen>

■日本人と molI (短調) の相性

助川：作曲学的に見ると、「青い山脈(S24)」ね・・・歌詞は明るいのに、音階がマイナー、短調。日本人の心や感性が出るのかなあ。短音階がしみついているのかな。もっとも、トルコの音楽もマイナーが多い。しかしそれが、悲しい感情の表れではない。そこが注目される。日本人にとっても、マイナー、「短調」即、「悲しい」、というものではないのかもしれない。どうなのでしょう。

橘川：マイナーなものでも、行進曲調にしてテンポを上げてフォルテにしたら、とたんに悲壮感のある勇ましい曲に変わりますね。単に、悲しい、涙、力が抜ける、寂しさに浸るというマイナーのイメージの真逆になる。

助川：旧制高校の寮歌も短調が多い。というより原曲が長調なのに勝手に短調に変える。北海道大学の「都ぞ弥生(明治45年)」。これをマイナーにして歌う場合がある。本当はmol1ではなくDurです。昔、札幌駅でオルゴールで流れていた時もマイナーだった。抗議しようかと思った。原曲をゆがめるけしからんことですよ。この歌は、北海道の広大な天地を歌っている明るい歌ですよ。

佐藤：mol1やマイナーは、哀しみよりも、慰めがつよいのでしょうか。

助川：悲壮感があるんだろうね。クラシックの作曲でも出て来るかもしれないよ。戦後60年も経って、今の若い人たちの感性はどうなのでしょうね。マイナーがよいという好みが変わってきてますかね。

橘川：Durでは、若い世代の歌ものの「バラード」は、長調で書かれているものが多いですが、ゆったりと歌われると、じーんと来るとか、マイナーよりもしっとりするという若い人の声もありますね。

助川：マイナーがよいという好みが変わってきているかな。



■「惜別の歌」・・・歌い継がれる歌の話

佐藤：寮歌や学生歌、そして残る歌というので、ひとつ思い出しました。今でも歌われている「惜別の歌(S20)」という歌のお話です。戦時中の歌になってしまいますけれど。

「惜別の歌」というのはね、いつも『音楽の世界』に『音・雑記-ひなの里通信-』を寄稿している狭間壮さん、彼が中大(中央大学)なんです。僕は一頃中大にコーチにいったから、そこに彼がいてね。友達になったんですよ。で、「惜別の歌」はその中大の愛唱歌になっているの。

橘川：「惜別の歌」が愛唱歌になっているんですか。

ず「ラ」を中心とした「ラドレミソラ」音階つまり、日本型エオリア旋法？が形成される場合もある。

しかし、戦後になると「銀座カンカン娘」のように、明確に洋楽の和声システムと音階で作られた曲も流行るようになる。ここでは「ファ、シ」も頻繁に現れ、臨時の#をともなった刺繍音（補助音）や、平行短調のドミナントなども現れる。この時代あたりから、大衆音楽は多様化して行き、その中から日本的音感を引き継いだ歌として「演歌」というジャンルが形成されて行く。

[illegible]

忘れられない、ご夫婦の演奏

先日惜しまれて亡くなった三善晃ご夫妻のピアノ連弾を聴いたことがある。公開の演奏会ではなく、知人のお嬢さんの結婚披露宴でのことだった。本来は2台ピアノのための作品であるミヨーのスカラムーシュを、三善さん自身が編曲されたのであろうピアノ連弾で、後半はメンデルスゾーンの夏の夜の夢の結婚行進曲へ繋がっているものだった。これが三善晃さんの定番なのかどうかは知らないが、新郎新婦ともに医療関係者であったための選曲であったのだろう。普通のアップライト・ピアノでの演奏であったが、それは楽しい演奏であった。

～ 十七絃箏、継承から発展へ ～

■音楽家としての始まり・・・宮城道雄先生に学ぶまで

私は、お箏はずいぶん後から始めたのです。音楽そのものは小さい頃からやっていましたが、最初はお箏ではなく、ヴァイオリンとピアノでした。小学生の頃です。15歳のある時、父が箏のリサイタルに連れて行ってくれました。それが宮城道雄先生のリサイタルだったのです。

すごくいい音なんですよ。素晴らしいのです。しかし、今思っても、いくらいい音だといっても宮城道雄先生のあの音は出せない。音というのは、その人が持っている何か不思議なその人らしい音、というのがあるんですね。私もそれまでお箏をやれといわれても、やる気がしなかったのが、宮城先生のあの音を聴いたとたんにやりたくなった。それからいてもたってもいられず、箏に進みました。女学校2年の時です。

丁度女学校にクラブがあって、そこに運よく宮城先生の姪の宮城数江さんが教えにいらしてました。他には東京音楽学校の卒業生が・・・とても華やかでした。ですからすぐにそこに入ったのです。宮城道雄先生の演奏を、その後も学校で聴いたこともあります。

その頃、昔芸大（東京芸術大学）のピアノ科出身の先生が近所にいらして両親と親しかったその方が可愛がって下さり、習いたいならそのあこがれた先生に習わなければダメだと云われました。でも、宮城先生との接点といっても、習い始めの人にあるわけではないですね。

そのピアノの先生と相談していたのですが、その頃、芸大の別科、昔の専科に宮城先生が教えにいらしており、15歳位で受験の資格がありました。そこに行って勉強した方が良いと。でも、行くなら試験がある。そこで一生懸命自分で勉強して練習して入りました。入ったのが女学校の4年のとき。宮城道雄先生の元についにたどり着きました。

その後、宮城先生にお習いした期間は、芸大を卒業してからお亡くなりになるまで。演奏旅行等でお忙しくても、奥の部屋でレッスンを受けたりしていました。

■劣等感とその克服、初めての十七絃箏

とんとん拍子に進んで来て、専科から本科を受験、合格しました。ですがこうして始めてから順調に進んでしまっただけに、曲を何も知らない。普通に受ける皆さんは小さい頃からやっているけれども、私は曲を何も知らなかった。覚えたのは試験曲ばかり。自分はとても劣等感を感じました。克服するには、とにかくやるしか

ない。古典を沢山やろうと思った。楽譜になっているあらゆるものを全部やってしまおうと、一生懸命でした。そのときは箏でした。卒業するまで十七絃に触る機会はありませんでした。

十七絃に初めて触ったのは卒業して6～7年たってからでしょうか。初めて東京新聞と三曲協会の共催で邦楽コンクールが開かれました。そこで唯是震一さんが、宮城道雄作曲「落葉の踊」を演奏するとの事。この三重奏曲を一生懸命やりました。十七絃を弾いたのは、この時が最初だったかもしれません。この三重奏を楽しく練習しました。

でも十七絃と自分とは相性が良いとは思いませんでしたし、楽器もまだ自分は持っておりませんでした。芸大の練習室で遅くまで練習をした事を覚えています。

それから十七絃の事をいろいろ考えはじめました。コンクールが確か1951年だったかと思いますが、1957年モスクワに行く時には、少し改良した自分の楽器を持って行きました。

■邦楽「四人の会」

邦楽「四人の会」を結成したのは1957年モスクワで開かれた世界民俗楽器コンクールと一緒にいったのがきっかけでした。その時のメンバーです。帰国してから、



このままこの四人で続けようと。しかしその頃一緒に合奏出来る曲が無かったものですから、新しい曲を作曲家に書いてもらおうという事にしました。いわゆる現代邦楽の初めの頃です。

毎年定期演奏会を開き、その最後に新しい委嘱作品を演奏しました。それと同時に古典も演奏する、決まったパターンでプログラムを組んでおりました。約18年続けました。

4人の会から脱退したのは、それだけ長くやっているとマンネリになりますし、私なら十七絃など、それぞれが楽器の研究などをしたいなど。だんだんそぐわなくなってきたこともあります。先は見えませんでした。1975年一大決心しました。これから先どう進むかわからない怖さがありましたが・・・。

それで、実際のところもう進めないかもしれないと思っておりましたら、76年4月から東海大学から招聘されました(1998年、退官)。そして、カメラータの井坂さんからもお声がけいただきました。ですから、邦楽四人の会から退いたあと、それでおしまいにならなかった。丁度、このように運良く引っ張っていただけました。色々なご縁でそうなったのだと感謝しております。十分に様々な事をやらせて頂きました。

■十七絃箏の発展のために（１）楽器の改良

十七絃は 1921 年に宮城道雄が創案された、合奏の中の低音を受け持つ楽器です。最初は、本当、十七絃って、低音しか出ない楽器・・・といいますが、私たち学生の頃は、何だかすさまじいものでした。力一杯男の人が演奏すると、低だけの馬鹿でっかい音がして。そのうち、触る機会があったので触っているうちに、なんとかならないのかなあと感じていました。

いつもマネージしてくれているカメラータの井坂さんが、「いい音がしなかったら、作曲者は曲を書かないよ」といわれまして、それから一生懸命楽器屋さんと開発して製作しました。だからものすごく音が変わってきました。

十七絃は、箏と同じく材料は桐ですがあまり良いところではなく、それを足したり、はいだりしたものもありました。それを、楽器屋さんでいい木を使ってもらいまして。やはり協力してくださる方でしたので、それこそ、いい材料で、大きな楽器を作りました。他の楽器もそうですが鳴らす時に力がいらすよ、いい楽器は。いい木質の固めのものを「刳甲（くりこう）」・・・中をくるんですよ。板を貼るんじゃなくて。密度があるような木を。刳甲にするような木を十七絃に使っていたいたのです。あまりの贅沢な使い方に、楽器屋さん同士で呆れていたそうです。

十七絃の大きさも変わってきました。昔は 8 尺の大きさがあったのです。ライトバンで運ぶのが大変でした。その後熱心な楽器屋さんと一緒に開発しまして、タクシーに載る大きさを測り、6 尺 8 寸に落ち着きました。今でもこの大きさが基準になっているようですね。

そうした試作の十七絃は、その都度違うものを作りまして、今では九面あります。その中でも、硬いだけじゃなくて、やわらかいけれどいい音になるなど、いろんな質の楽器が生まれました。この九面を作っているうち、だんだんそうやって使っていけるようになりまして、曲の性格ごとに使い分けられそうなものが三、四面あります。しかし、普通の箏以外にこれだけあるものですから、家の中が楽器だらけになりました。（笑）

■十七絃の発展のために（２）レパートリーを増やすこと、作曲家への委嘱

普通のお箏と十七絃との好みの違いは、ヴァイオリンが好きだ、チェロが好きだというようなものに近いかも知れないですね。音色の好みといいたいでしょうか・・・。そういえば、最初、曲がなかった時は、音域が近いということもあり、バッハの無伴奏チェロ組曲を弾いていました。今でも三番までは弾けます。一番は舞台にかけたことがあります。あれは、1980 年になってからでしょうか。

私は五線譜には親しみがあったので、よく劇伴を初見で頼まれたのです。それで、いろんな作曲家を知りました。短い劇伴でも、あの人は良い曲を書くのじゃないかと思い、声をかけて・・・それで書いてくださることになったのが牧野由多可氏です。すごく一生懸命やって下さいました。

作曲家の方は、いろいろな方が大変一生懸命協力して作曲して下さいました。そのおかげで十七絃がものすごく発達しました。例えば三善晃氏は、桐朋の学長でいらっしゃった時、学校へは私の家から裏道を通ると、割かし近いんです、それで、昼休みにお見えになったこともありました。そうして書いて下さいました。

こんな事もありました。主奏楽器としての十七絃に、決定的に確信を持てたのは、1965 年、牧野さんに書いて頂いた独奏曲の時でした。その曲も良かったのですが、演奏会の翌々日、その頃はまだ今のように有名ではなかった武満徹氏からお電話がかかってきました。一度、伺いたいと。そして、よほど気に入ってくださったのか、その年の秋から、ずっと毎年仕事をしていました。1966 年の大河ドラマ「源義経」で十七絃が入っています。この大河ドラマのときには、毎週 NHK に通いました。

さらに武満さんから毎年、映画を必ず一本頼まれるようになりました。そのときもお箏は使わず、十七絃のみでした。『天平の薨』や『利休』など色々ありました。利休の自殺のときに、その部分を十七絃だけでずっと続けられました。それほど使って下さいました。武満さんは邦楽器にも大変興味をお持ちで、特に低音が好みだったのでしょうか。琵琶の鶴田錦史さんや尺八の横山勝也さんとともに、私もよく呼ばれました。琵琶は壊れるまで自分でいじったそうですよ。それで、演奏会用の曲を書いて欲しいというと「書く程自信が無いなあ」と言っているうちに、残念ながら亡くなってしまいました。

こうして、多くの皆様がたくさん書いてくださったおかげで、本当に良い出会いのおかげで、十七絃がソロ楽器として、主奏楽器として成り立てるようになりました。



■十七絃の発展のために（3）十七絃の特徴を生かすということ

私はただ、夢中で十七絃に向かってやっていました。いい音で弾きたい、いい音を鳴らしたい、それだけで。そうしたら、あとは自然とつながっていったようでした。小島美子先生がプログラムに書いて下さっていますが、「十七絃にとって宮城道雄は生みの親、菊地は育ての親」だと……。嬉しいお言葉ですが、最初はただただ本当に大変でした。楽器との格闘が凄かったのです。

十七絃箏は、低音楽器が日本の楽器に無かったので、ご存知のように宮城先生がこしらえました。でも十七絃は、通常の箏とは違います。絃も太いので、タッチを変えなければなりません。又、絃は、今は箏の場合ほとんどがテトロン絃を使っていますが、十七絃の場合、音が全然違います。

若い人には、金額の問題もありますが、高い音の方はテトロンを使い、低い方は昔からの絹糸を使ってもらいたいと思っています。響きが全然違いますから・・・私は全部絹糸です。

十七絃を古典（十三絃の曲）に使った事もあります。海外に行く時、両方持ってゆく訳にも行かない時がありますから。それこそ、「六段」でも「乱れ」も、大変雰囲気があり、良い感じがしました。



■若い人へのメッセージ、未来に期待すること

若い人に望む事。それは、土台が無ければいけないということです。基礎をきっちと勉強しているかどうか。古典を一通りしっかり勉強してほしいです。私たちも新しいものばかりやっていたかという、そうではありません。私も、組歌の勉強のために、京都までレッスンに行きました。おおらかな感じの組歌を勉強して、やっぱり古典を知らなくては・・・と思いました。

今では十七絃で一晩のリサイタルを出来る人が、出てくるようになりました。こちら、曲選びの相談など、色々やっています。その点、みんな恵まれていますし、こちらにも恵まれています。勉強をする人は、とても熱心ですね。

私が委嘱した曲、それを演奏したいから聴いてほしいというレッスンも多いです。私も喜んで教えます。さらに、そういう人達に、みんなと同じ世代の人にも委嘱したらどうなの？とも言いますね。だってそうでないと、いくら委嘱をした曲といえども、時代とともに変わってゆくわけで、そうしたら大昔の曲だけをやっていることになるでしょう？



そして十七絃を奏する以上は、音を大事にしてほしいです。箏と十七絃は同じではなく、タッチが違う。そう云う事を含めて色々な事を研究して、深めてほしい。ただ弾くのじゃなく、手ばかり速く動かせるのではなく、音を大事に。他の演奏会（他の楽器）を聴くだけでも勉強になります。自分の演奏と楽器の栄養になります。それを凄く感じます。

さらに、演奏会だけでなく、交流を持てる会があるといいですね。日本音楽舞踊会議のように。作曲も楽理も、色々な人達が集まってわいわい出来るような。話し合い、研究し合う。邦楽部会が出来た事はとてもいいけれど、邦楽だけで固まらないように。色んな分野の方と交わるとか演奏会を聴くとか、ね。

ぜひ頑張ってください。

菊地梯子プロフィール



東京音楽学校（現東京藝大）卒業、同研究科終了。宮城道雄、宮城喜代子に師事。1957年モスクワ、1959年ウィーンにおける世界民族楽器コンクールに日本代表として参加。一意金賞受賞。1957年「邦楽四人の会」を結成、現代邦楽の創造に重要な貢献をし、芸術祭賞、芸術選奨など受賞。1975年「邦楽四人の会」を退会。

1983年オランダ・フェスティバルの招きにより、オランダ各地でリサイタルを開く。1987年ドイツ・ケルンに於ける世界現代音楽祭（ISCM祭）、1990年ノルウェー・オスロに於ける世界現代音楽祭に出演。1993年台北に於けるアジア作曲家連盟の音楽祭に出演。その他、国際交流基金の派遣、助成により海外での演奏活動も多い。

また、国内では、1979、80年文化庁芸術祭参加公演のリサイタルが〈優秀賞〉を受賞。1981年、芸術祭参加のレコード「菊地梯子 十七絃箏の世界」が優秀賞を受賞。1990年度芸術選奨文部大臣賞受賞。1995年、紫綬褒章受賞。2001年、勲4等宝冠賞受賞。2013年松尾芸能賞受賞。東海大学名誉客員教授。

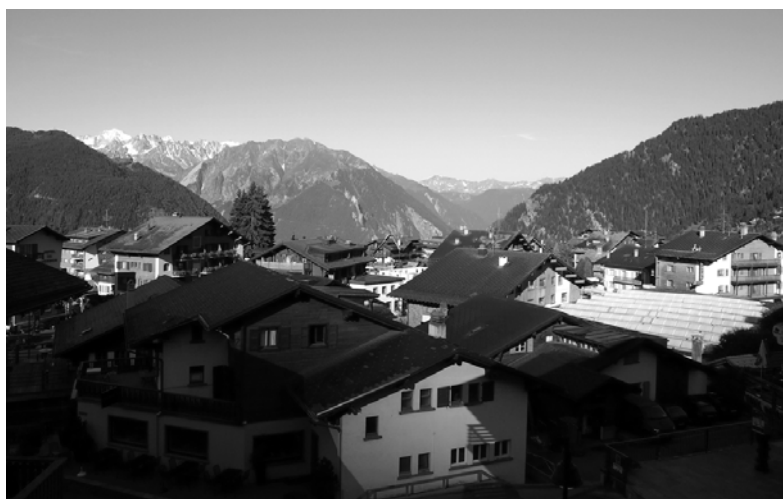
取材：2013年12月6日／紀尾井町・ホテルニューオータニにて
高橋通／橘川琢（文責）

2013 スイス・ヴェルビエ音楽祭

(Verbier Festival & Academy)

ピアノ 草野 明子

ヴェルビエ音楽祭 (Verbier Festival & Academy) は、スイスのスキーリゾート地、ヴェルビエで夏季に開催されている音楽祭で 1993 年に始められ、同時に音楽講習会が開かれ、若手音楽家の教育の場にもなっている。今回は 20 周年記念として 7 月 19 日から 8 月 4 日までの期間多彩な音楽会、また興味深い講習会など行われた。音楽会場は夏のための特設会場 (Salle des Combins) と Eglise 教会がメイン会場となり、午前 11 時、14 時 30 分、20 時から、と連日演奏会が行われている。著名な音楽家が世界中から集まり、ソロリサイタル、室内楽、コンサート形式のオペラなど規模も年々大きくなっている。また、若い演奏家たちがベテラン奏者と取り組む室内楽はここではならの楽しみとなっている。今年はワーグナー、ヴェルディの生誕 200 年にあたりそれを取りあげた演奏会も多く魅力的なプログラムにあふれた音楽祭となった。



ヴェルビエの街

筆者は今回初めてヴェルビエを訪れたが道順としてはジュネーヴから電車でマルティニー (Martigny) 行きに乗りレマン湖沿いに約 1 時間半、乗り換えてルシェーブル (Le Chable) まで 20 分。そこからポストバス又はタクシーで 25 分乗り標高 1600m にあるヴェルビエに到着する。周りは 2000m から 4000m 級のアルプスの山々に囲まれており、それは言葉に

表せないほどの絶景である。フランス、イタリアに国境を接したスイス南西に位置し、使用言語はフランス語だが有名なスキーリゾート地ということで英語はどこでも通じる。

宿泊施設も数多く、大体どこでも歩いて行けるが講習会場、音楽会会場までは無料の送迎バスがあり音楽祭期間中は街中が一体となり支援体制が整えられている。会場での案内係も皆ボランティアの方たちが支えている。これだけの規模の音楽祭を開催できるのはやはりスイスの優良企業、たとえば時計のローレックスがメインとなりネスプレッソ、州など数多くのスポンサーの力によるものであろう。またほ

とんどの演奏会がオンライン（TVmedici）により配信され一定期間オンデマンドでも無料で視聴できるという試みも有難い。

[文書の引用文や注目すべき箇所の要約を入力してください。テキスト ボックスは文書のどの位置にも配置できます。抜粋用テキスト ボックスの書式を変更するには、[テキスト ボックス ツール] タブを使用します。]

●音楽祭

7月22日にヴェルビエに到着し8月1日までの滞在の中で7つのコンサート、ピアノ、声楽の講習会を聴く事ができた。今回の目的はピアニスト、グリゴリー・ソコロフ (Grigory Sokolov) を聴く事で、ご存知のように1950年サンクト・ペテルスブルグ生まれのソコロフは16歳にしてチャイコフスキーコンクールを制したがまだ東西の壁のある時代で演奏活動も限られた地で行い私自身も彼が24歳頃のプロコフィエフのピアノ協奏曲をウ



ソコロフ（右）と筆者

ィーンで聴いて以来長らくその演奏に接していなかった日本には1990年代の初めに来日したきり。飛行機嫌いということで現在その活動はヨーロッパのみ。今から6年前にザレツブルク音楽祭でその演奏に再び接した時は現在「最高のピアニスト」



エグリーゼ教会

として称えられていることを実感した。今回の彼のプログラムはシューベルトの4つの即興曲 D899、3つの小品 D946 とベートーヴェンのハンマークラヴィーアソナタ Op. 106。エグリーゼ教会は600人ほどの収容で満入り。この会場は自由席のため開演1時間以上前から皆席取りのために並ぶが、会場外ではソコロフのリハーサル中のピアノが聴こえてくる。あの大曲のベートーヴェンをリハーサルでもすべて本番同様に弾いているの

も驚きだ！彼の魅力は徹底した分析、揺るがぬ技巧。そして何よりもその奏でる音色、音質は特筆すべき感動を覚える。アンコールにラモーなどを5曲、至福の時であった。ここでの演奏会での魅力は奏者と演奏後会話ができるアットホームな雰囲気

気があり楽屋には多くの人々が入れる。ゲルギエフ、マイルスキー、ケーシン、ネトレプコ、ペロフなどこの音楽祭に参加する人々も称賛に訪れていた。

次にゲルギエフ指揮によるヴェルディ「オテロ」とワーグナー「ワルキューレ第3幕」のコンサート形式による演奏会を聴く。オーケストラはこの音楽祭のために結成されたフェスティバルオーケストラ。ネトレプコのデズデモナ、ドイツ人ベテランソリストのワーグナーはそれぞれの味わいがあり楽しめ、ゲルギエフのオペラでの手腕はさすが。しかし同年に生まれたというこの2人の作曲家は相反しており一晩にまとめるのは少々無理があったようにも感じる。

会場はコンバンと呼ばれる特設会場。1200人以上は収容できるかなり大きなホールで思ったより音響が良かった。



ミシェル・ペロフの室内楽コンサート

27日は私が勤務している国立音大で隔年招聘しているミシェル・ペロフの室内楽コンサートを聴く。彼の得意なメシアン、それも「この世の終わり」をクラリネットイスト、マルティン・フロスト、チェロのカプソン弟など若手と組んでのアンサンブルはピアノがきちっと核を成して若手がその上で自由に泳ぎ回るという相乗効果があふれた室内楽の醍醐味を味わえた。またフロストのクラリネットは人の心をここまで揺さぶるのかというほど音色

の変化には驚いた。

28日はダニール・トリフォノフのピアノリサイタル。2011年にルービンシュタインコンクール、チャイコフスキーコンクールを次々と制したまだ22歳のピアニスト。2010年のショパンコンクール(3位)の時のコンクールのライヴ配信で初めて聴いた時から印象に残りその後のこの若いピアニストの短期間での成長には目を見張るものがある。東京での演奏会は必ず聴いているがヨーロッパでの反応はどのようなものかも興味があった。プログラムはスクリャービンのソナタOp. 19、リストのソナタ、



トリフォノフ（左）とバシュメット

ショパンの前奏曲 Op. 28。このプログラムはカーネギーホールデビューのライブ録音 CD が既にドイツ・グラモフォンからリリースされているが、トリフォノフの魅力が余すところなく発揮されている。彼の特質はその音色の変化、自由なアゴーギグ、そしてそれを表現する抜群の技術。22 歳とは思えぬ音楽の成熟はどこまで進むのか目の離せないピアニストである。彼は 29 日にはヴァイオリンの R. カプソンとデュオコンサート、30 日は音楽祭 20 周年ガラ・コンサート。31 日はヴィオラのバシュメット等とドボルザークのピアノ五重奏と 4 日連続で出演。どれもが極めて水準の高い演奏会でヴェルビエにおいても主役の一人であった。31 日友人と昼食をとっていた所、偶然その日のコンサートに出演するトリフォノフとバシュメットに遭遇した。気軽に写真撮影に応じてくれ言葉をかわしたがこういう場面も街の規模がコンパクトゆえ日々思いがけぬ友人と再会など楽しい思い出ができた。

8 月 1 日滞在最終日に特設会場でヴェルディの「レクイエム」を G. ノセダ指揮で聴き、丁度その日はスイスの建国記念日にあたり屋台が出て花火が打ち上げられ街中がお祝い気分で音楽祭を盛り上げていた。今回私が聴かなかった演奏家には若手ではユジャ・ワン、ヴァイオリンの J. ヤンセン、またキーシン、アックスなどの豪華な顔ぶれであり時として演奏会が同時に行われていて聴く事が出来なかったのが少々心残りでもある。

●講習会

演奏会に行かなかった午前中はこの期間に行われている講習会を聴講した。ピアノはロシア人のバシキロフ教授のクラスを聴講。80 歳を超えられたとは言えエネルギーギッシュなレッスンは健在でロシア人学生二人がハイドンのソナタ、シューマンのクライスレリアーナを受講していた。英語の公式通訳がついており聴講は無料。街の中心からはバスに乗り（これも無料で至れり尽くせり）15 分くらいの施設で行われた。自然に囲まれた素敵な所で、普段はコンGRES センターとして使われている。レッスンは非常に細かく左の和声的進行による表現不足を皆指摘され、音価の大切さ、音の作り方、脱力など基本に忠実ながら教授の音楽に対する真摯な姿勢、教えることへの情熱など自分にとっても新たな刺激を頂くことができた。またもう一つは声楽の T. クヴァストホフ (Thomas Quasthoff, 1959-) で、ドイツのバス・バリトン歌手。サリドマイド禍による肉体の障害を乗り越えてキャリアを積み重ねたが 2012 年に健康上の理由により歌手としてのキャリアに終止符を打って引退したが公開レッスンなどは積極的にこなしている。私も今まで録音、映像のみでしか知らなかったが今回そのレッスンに接し、セミ・プロとも思える実力のある受講生に対し、歌唱や演技への的確なアドバイスや自分自身の経験を交えた軽妙なトーク、また音楽を学ぶ姿勢など 2 時間半余りの時間があっという間に感じられるほど素晴らしいレッスンであった。今回のヴェルビエでの大きな収穫となった。また引退したアルフレッド・ブレンデルも室内楽のマスタークラスを開講していたが時間が合わず残念ながら聴けなかった。このように連日エキサイティングなイベントが行われ 10 日余りの滞在は充実したものになったがこんなに早く日が過ぎてしまったのが惜しい気もする。

●観光大国スイス



特設会場前で 中央が筆者

また、スイス滞在は観光大国としてその魅力を大いに発揮してくれた。まず、この自然の中、連日 4000m 級の山々を眺めているとまるで天国に近づいた気分になり、下界と断絶された距離感もなかなか味わえないものである。滞在中日帰りでアルプス 3300m までケーブルカーで登りそこからの壮眺望は圧巻である。モン・ブランやマ

ッターホルン、氷河も見ることができ、2200m あたりで 1 時間ほどの山歩きも楽しめた。もう 1 日はモントルーまで降りてチーズで有名な中世の面影を残すグリエールにも行きチーズフォンデュを堪能した。スイスを訪れたのは 15 年ぶりくらいだろうか。今回のように一所に留まり 10 日間を過ごすのは初めての経験であったがとにかく外国人への対応が素晴らしく嫌な思いをする事が一度もなく、また他のヨーロッパに比べて車の運転もとてもマナーが良く、物事が確実にきっちり進むことにも感動を覚えることも度々あった。あえて言えば物価の高さだけは覚悟した方がよい。夏場のヴェルビエはオフ・シーズンにあたるのでホテルなどは冬場に比べれば半額であるが、食事は思いのほか高くつく。ファースト・フードレストランは皆無、世界中どこにでもあると思われる中華レストランもない。しかしサービスの良さがそういう事も帳消しになっていると言えよう。

音楽会に通う聴衆の年齢層も高く 60 代、70 代の方たちが山歩きする服装で気軽に、純粹に音楽を楽しむに聴きにやってくる。特にエグリーゼ教会はステージと客席が近く演奏家と一体になって音の世界に浸ることができる。入場料も 60~165 スイスフラン（6000 円~16500 円）ほどで、他の物価に比べれば安いと言えよう。ザレツブルクやウィーンの音楽祭の規模にはかなわないが、街全体がこの音楽祭を見守り、成功させようという雰囲気に溢れておりまたここを必ず訪れようという気持ちになる。そろそろ 2014 年のプログラムも発表されるので楽しみに待つこの頃である。

草野 明子（ピアノ 国立音楽大学教授／本会ピアノ会員）

深沢亮子、恵藤久美子、安田謙一郎
ピアノとヴァイオリンとチェロのタベ

音楽評論 浅岡 弘和

日本音楽舞踊会議主催の師走の恒例行事である室内楽コンサートが今年も開催。今回も日本クラシック音楽界の重鎮である深沢亮子、恵藤久美子、安田謙一郎の3人が登場。モーツァルトのピアノトリオをメインに意欲的な演目が並べられた。

前半はまず深沢のピアノソロにより助川敏弥のピアノ作品2曲が作曲者臨席の下、採り上げられた。1曲目「Gismonda」は2010年から翌11年にかけて作曲され、助川がかねてより愛好するチェコの画家アルフォンズ・ミュシャの同名の絵からインスピレーションを得た小品。ミュシャは無名の若き日パリで大女優サラ・ベルナールが主演する劇[Gismonda]のポスターを描き、それが彼を世に出すキッカケとなったという。曲は最近の助川らしく、まるで彼岸と此岸を行き来するように無調と調性音楽の間を揺れ動く。2曲目の「ちいさきいのちのために Lacrimosa」は助川自身の十年前の喪失感から生まれた一種の鎮魂曲だが、奇しくも夭折の天才モーツァルトの絶筆と同じである。演奏も深沢の透徹し切ったピアノズムがそのところを得、魂の救済を実感させた。

以降は全て三楽章構成の室内楽作品で、まず深沢、恵藤、安田の豪華トリオによりモーツァルトのピアノ三重奏曲第7番ト長調K564が演奏された。モーツァルトのピアノトリオは彼の2曲のピアノカルテットに比べるとやや安易に書かれ、ベートーヴェンやシューベルトほどの深みはないが、ピアノに重心が置かれた作品だけに深沢のピアノのウィーン仕込みの愉悅が物を言っていた。

後半はまず恵藤と安田がダリウス・ミヨーのヴァイオリンとチェロのためのソナチネを採り上げたが、これはミヨー61歳の時に作曲された自由奔放な力作。演奏も名手2人の熾烈な激突にも関わらず息のピタリ合った名演となっていた。

最後はモーツァルトのピアノ三重奏曲第6番ハ長調K548で、これを以てこの3人によるモーツァルトのピアノトリオ全7曲演奏も遂に完結。彼の三大交響曲と相前後して完成された作だけに第一楽章など随分シンフォニックに書かれ、最早ピアノソナタの変種などではない充分聴き応えのする音楽になっている。そのせいもあるのか名手3人が醸し出す洒落た味わいといい、滅多に耳にし得ぬ成熟した名演が繰り広げられていた。アンコールには第2楽章が再び演奏された。

(12月6日、音楽の友ホール)

(あさおか ひろかず：音楽評論家)

歌の道・我が音楽人生 (1)



～プロ室内合唱団「日唱」と共に半世紀～

日本合唱協会代表 久住 祐実男

第1部＜音楽家を志す迄＞

私は昭和6年8月28日の東京生まれ。私の誕生日はかのゲーテの誕生日と一緒なのだ。何の根拠もないが何故かラッキーな気がして、つい自慢してしまう。因みにチェロの平井丈一郎さんも同じ8月28日と伺っている。他にどなたか音楽家で8月28日生まれの方はいらっしゃるだろうか

それはさておき、私の父は明治25年の深川生まれで、実家は材木問屋だった。そのせいか、気（木）が多く、とても多趣味だった。すぐ近くに同年生まれの芥川龍之介が住んでいた。幼友達で、木場で魚釣りをしたり、川に浮かべて貯蔵してある材木に乗って遊んだりしていたそう。三中（現両国高校）から一高、帝大と二人一緒に進み二人とも銀時計組で卒業した。父は趣味で尺八を吹き、休日にはよく座敷で首を振っていた。箏の大家・宮城道雄先生と懇意にされていて、先生を我が家にお招きして、父の尺八と「春の海」を合奏したことがあって、それが一生の自慢の種だった。また絵画の鑑賞が好きで、幼い私を連れてよく美術館に出かけた。読書好きでもあった蔵書は書斎に一杯だった。沖電気の重役で、勤めは忙しそう、普段あまり父の顔を見なかった。

そんな父だが、自分の家の土地の半分位を使って幼稚園を経営していた。その幼稚園の先生だった母と結婚した。母は大分県日田市の生まれで、小さい頃から歌が大好きだった。小学唱歌や文部省唱歌は全部覚えていつも口ずさんでいたそう。母は幼稚園の先生になりたいくて、二十歳前の若さで、日田から一人で東京に出てきて、独学で東京女子師範学校に入学した。志を果たしたのだった。

私はこの母から教わって沢山の唱歌・童謡を覚え、歌好きの子供に育った。生まれつきひ弱だった私は小学校5年生までは年中病気をして、学校と病院と半々くらいの生活だった。自家中毒という病気で、今時はあまり聴かない病名である。しかし入院するとすぐ良くなってしまうのだが、それでも4、5日は入院していた。その間、暇で 病院の廊下を歌いながら歩いて回ったので、評判になり「歌の坊や」と呼ばれ、看護婦さんたちから可愛がられた。学校でも何か行事あると独唱させられた。小学校6年になる頃から病気一つしないようになった。

中学一年の時の音楽の先生はバス歌手の栗本正先生だった。先生はある日召集令状を持ってみんなの前に立ち「元気で行って参りまーす」と云って出征された。ところが一週間で帰って来られ暫くまた教壇に立たれた。噂によると栄養失調で兵役検査に不合格だったそうだ。そういえば初めてお会いした時、がりがりに痩せて見えたのをおぼえている。

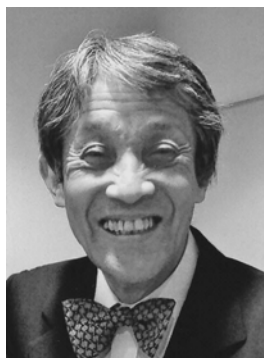
中学二年になると音楽の先生はやはり声楽家の須賀靖元先生がいらした。これは私にとっての運命の出会いだった。それは後に触れることにして、中学時代の話を見せて頂く。私が通った麻布中学校は、当時、戦時下では、先輩たちは海軍幹部候補生を目指して勉強していた。それで4月には母校に入学の報告のため、白の詰襟に腰には短剣を差した、憧れの姿で何人も現れた。内藤法美さん（後の越路吹雪の旦那）もその中の一人だった。中学では軍事教練という時間があって、軍事教官が厳しく指導した。私なんぞ体が小さくひ弱で、重たい三八銃を長く持っている事が出来ず、すぐに下におろしてしまうと、忽ち教官の鞭が飛んできた。お陰で教連が終わると痣だらけだった。

翌年終戦になると、学校内の雰囲気はガラッと変わり、さながら芸能学校よろしく、月1回の土曜日にはきまって演芸会が開かれた。内藤さんのアコーディオンや小沢昭一さんの落語、フランキー堺さんの漫談、加藤剛の芝居等々皆高校生とは思えない素人はだしの充実したものだった。私も独唱をした。後輩の和田則彦君が弾く、バルトークのピアノ曲等はすごかった。このような月1回の演芸会がとても楽しかった。

私は須賀先生に勧められてコーラス部に入りソプラノを歌った。私はどうも奥手で中学4年生までは声変わりをせずボーイソプラノだった。この声がほめられたのをいいことにして校内だけでなく近くの姉妹校でもあった東洋英和女学校のコーラス部と交流と称して、我がコーラス部はよく出かけて行っては一緒に歌った。これも麻布時代の楽しい思い出になった。

私のコーラスへの病みつきは、実はこの体験だけではなく、我が家での濃密なる、体験があった。

（続く）



久住祐実男（くすみ・ゆみお）プロフィール

東京藝術大学卒業。在学中は声楽をリア・フォン・ヘッサートに師事。指揮法を渡辺暁雄と山田一雄に、和声法を下総皖一と石桁真礼生に師事。卒業後は指揮と和声法を小船幸次郎に師事。1963年、仲間20人で、究極のアンサンブルを目指してプロ室内合唱団「日本合唱協会（日唱）」を創立した。1973年には音楽教室「日唱ミュージックアカデミー」を設立し、クラシック音楽の普及に努める。現在日本合唱協会代表及び指揮者。日唱ミュージックアカデミー校長。日本演奏連盟会員。

これで いいのか？
— まずは深呼吸だ —

「美味しい食事は、その時幸せ。床屋に行けば、3日は幸せ。それより一生を、のお望みなれば、さあ歌いましょうご一緒どうぞ！」の口上。50年前の歌声喫茶だ。

そんなこと思い出したのは、これから床屋に行くからだ。さてそれでは、3日は幸せ保証？の散髪コース。さっぱり終われば、店の外に。一つのびして空を見上げる。しかし本日、天気晴朗なれどいつもの爽快感がない。

今朝の新聞（2013年12月7日）の大見出しのショックが尾をひいている。

特定秘密保護法成立

3日間の幸せどころか、気分転換にもならないのだった。



よもや成立すまい、と思っていたこの法律。内容にかなりの問題あり。— 白熱する国会でのやりとり。担当大臣のあたふた答弁。運用次第では、国民の基本的人権を奪いかねない法律。国会議事堂をゆるがす法案反対デモのシュプレヒコール（これをテロとみなすか？！政府与党の幹事長発言）。70%近くの反対世論を新聞が伝える。各地の反対デモの様子インターネット上を飛びかい。思想信条宗教をこえて、多くの識者が反対の声明。果ては国際ペンクラブまで懸念を表明した。—

これでもか、とばかりの反対の声。まだ続いて。こんな世論を背にしては、も

う廃案でしょう！と思っていた。と、よもや！与党多数での強行採決に。

愚かな選択ではなかったのか、選良諸氏！自縄自縛、自爆行為だと覚悟の上での採決か。選良とはすぐれた人、選び出された代議士、と辞書にはある。

斬くして法案は、案がとれて、「特定秘密保護法」として、公布される。この法律、全文読み通すのはなかなか困難。それでもと、専門家の解説を参考に概観すれば、これがなかなかのくせもの。恣意的な運用次第では、希代の悪法かつての「治安維持法」に化ける恐れあり。その運用のひそみになれば、国民の耳目を奪い、口をふさぐことも自在なのだ。

「保護」の大義のもとに情報が次々と隠蔽されたら、国民は海図を失った船のごとくに漂流し、遂には沈没の憂き目に。国民主権（民主主義）はやがて名ばかりのものとなり、窒息するかもしれない。

法は時として、独り歩き of 暴走を始めることがある。つい最近までの長期の裁判闘争で、名誉回復を果たした「治安維持法」下の横浜事件など、その例枚挙にいとまがない。

独り歩き of 身近な例がある。「国旗国歌法」だ。この法律2条からなる。1、国旗は日章旗に。2、国歌は「君が代」に。それだけ。

そして「今回の法制化は、国旗と国歌に関し、国民の皆様方に新たに義務を課すものではありません—後略—」の談話を、政府が出した。

ところが国技の相撲はともかく、スポーツの場で「君が代」の奏されることが

多くなった。国際試合でなくてもだ。アメリカンスタイルよろしく、プロ野球の始球式の前に、マウンド上で独唱者がア・カペラで「君が代」を歌うのが定番になった。新たに課された義務でもないのに。

若いバリトン君に「君が代」のレッスンを頼まれたことがある。プロ野球地方BCリーグの始球式で歌うことになったという。彼は、ゴスペル歌手。かつての違う「国歌」。私をたよってきたのは失敗は許されぬ、の緊張感からだろう。

お役目無事つとめられたとのこと。それから何度かマウンドに立っているらしいが、今のところ無敗のようだ。

これなど、へえ！の軽い話題だが、学校現場では少々趣きを異にする。卒業式および入学式での教師の様子がチェックされるのだ。国歌斉唱、起立してるか、さては歌っているかの口の動き……。違反(?)があればペナルティーが科せられる。確か「君が代」、強制ではなかったはず。なのに。

憲法に定める基本的人権は、歌う自由も、歌わない自由も、すなわち「内心の自由」をまるごと保障するのではなかったかなどと、ニュースになるたび私はつぶやいているのだ。

法律制定からわずか15年。その間に醸成された空気感。強制されなくとも、法律の背後に何かあるのではの憶測をたくましくして、自主的にルールが作られ、それに従うという構図ができあがる。不本意ではあっても。国旗にも同じよう

なことがあるが、それは、別の機会に。

さて、「特定秘密保護法」だ。特定される秘密が何かを知らされない。誰でもが、その秘密の地雷をうっかり踏みかねない。それは賛成票を投じた議員諸氏もだ。



「いいとこ床屋の縁の下」なんてざれ言がある。床屋は情報の交差点。おじさんの「しゃべり場」サロン。ここでの

気軽なおしゃべりに法の網が張られてはいないか、などと心配するようになれば、市民生活は穏やかではない。もの言えば唇寒し、自主規制の空気に笑顔も消える。そんなことになれば、残念。

「一生幸せでいたいなら歌をうたおう！」だなんて……。今に好きな歌も歌えなくなる。詩の内容にまで立ち入れ、いやそんな空気に気圧されての自主規制。表現の自由、そして芸術活動が畏縮させられる。かつての歴史が教えるところだ。そうであってはなるまい。「では、おまえには何が？」

かりこんで冬の外気にスースーの頭をさすりながら、自らに問うている。

ともあれ2014年の幕明け。光の春の大気を胸に充たし、まずは新春の夢と希望を語ることから始めたい。

【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

【挿絵】武田 光弘(たけだ みつひろ)





名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 45 回〕

ケチン坊だった作曲家

物々交換が当たり前だった古い時代はともかく、通貨が登場してからの人間の生活は、基本的に入るものと出るものとのバランスで、成り立っている。入るもの（収入）が大きければ好きなことができて貯蓄もできるし、出るもの（支出）が大きければあれこれと制限されて不自由とならざるを得ない。その辺をどう考えるかによって、人は「儉約家」か「浪費家」のどちらかに分かれる、といってよいだろう。

これを作曲家たちに当てはめると、例えばモーツァルトやシューベルトは、その時の状況によってパッパッと使ってしまう「浪費型」といってよいだろうし、他の多くの作曲家たちは、まあ「儉約家」の部類に入るとはいえるだろう。ところが、この儉約型の中でもちょっと度がすぎる人、俗な言い方をするなら「ケチン坊」「けちんぼ」な作曲家というのがいて、浪費型とは別の特徴を示している。どんな人が、どんなケチぶりを発揮したのか、2,3 の例をご紹介します。

まず一人は、ベートーヴェンである。彼のケチぶりは例えば、才能を認めて援助してくれた貴族が財政的に破綻した時にもなお、「約束通りに払ってくれ」と訴訟を起したこと（1813 年頃、キンスキー公）や、家政婦が浪費をしないかと細かく干渉し、気に入らないと次々と交替させたこと（1816 年頃）。作曲す

るたびにどこへ売り込んだ方が有利か、いつも計算していたこと（1824 年の「第九」交響曲ほか）。家計に関して細かなメモを残していること。資産があるのに苦しいという援助要請の手紙をあちこちに出していること（1816 年以降）。死んだ後には現在にして一億円にもなろうかという現金を残したことなどからも想像できるように、かなり徹底したもの。カネに対してよほど執着があったらしい。それというのも、16 才にして母親を失い、飲んだくれの父親に代わって弟たち 2 人の面倒を見なければならなかったことや、ライバルがひしめくウィーン音楽界で生きていくために身につけた生活の知恵だったかもしれないし、聴覚を失いながら作曲を続けたベートーヴェンが、唯一頼りにできる心の支えだったのかもしれない。

次に、ニコロ・パガニーニ（1782～1840、イタリア）のケチぶりも有名である。彼の場合は、生活上というよりも仕事上、演奏技術についてである。いうまでもなく彼は、史上最大のヴァイオリニストといわれた人物で、重音奏法、左手ピチカート、弓が跳ねるように見えるスピッカート、倍音効果のフラジョレット、G 線（一番太い弦）だけによる演奏、弓の木部で弾くコルレーニョーなどの難技巧を次々と考え出したが、彼はそれらのテクニックを他人に盗まれること

を極端に嫌った。そのために楽譜はめったに見せず、出版することにもきわめて消極的であった。例えば代表作といえるヴァイオリン協奏曲は少なくとも6曲が書かれていたが、永い間出版されていたのは第1・2番だけで、第3番以降が聴けるようになったのは、20世紀も70年代近くになってからなのである。他の作品についても同じ。生前に出版されたものはきわめて少なく、彼の全貌についてはまだ不明の部分が多いといわれているのである。歴史上では多くの作曲家に影響を与えているだけに、彼のケチぶりが残したマイナスは結構大きい、といってよいだろう。

さてもう一人は、モーツァルトより4才年上、ベートーヴェンが高く評価したというムツィオ・クレメンティ（1752～1832、イタリア）である。私たちにはピアノ学習者がよく弾く「ソナチネ」で親しいが、生前はピアニストとして有名で、その卓越したテクニックは、あのモーツァルトと腕くらべをした（1781、ウィーン）という記録からも大変なものだったようである。モーツァルトやベートーヴェンと同時代にぶつかってしまった不利を避けようとしたものか、彼は教育・出版・楽器製造へと手を広げ、その

方面で驚くほどの商才を発揮したが、ケチぶりというのはこんな具合である。



ムツィオ・クレメンティ (1752-1832)

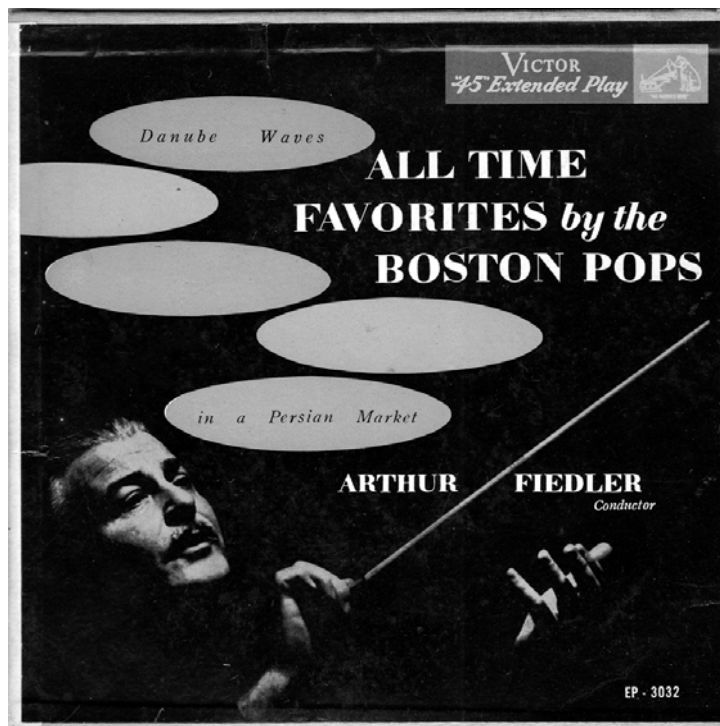
例えばピアノの弟子が来ると、高い月謝を取る一方、自分の楽器店で弾かせ、それを客に聴かせて楽譜とピアノを買わせてしまうという体のいい販売員代わり。それを国内だけでなく、海外の販売店でもやった（「夜想曲」の創案者ジョン・フィールドはその一人）というから、頭がいい。ほかにクリーニング代をケチって自分で洗濯したという話もあり、亡くなった時には一生かかっても使いきれないほどの莫大な財産を残したという。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



イヴァノヴィチのワルツ《ドナウ河のさざなみ》

近年、クラシック CD では 10 枚組とか 40 枚組などという BOX-SET が大流行している。CD の売上不振の中、過去の膨大な録音資産をもつレコード会社が需要の喚起を狙って始めたのがきっかけだった。価格は 40 枚組でも 1 万円そこそこで、CD 1 枚あ



たりの値段は数百円程度。昔の CD の価格を考えると 1/10 程度なので買う側からはとてもお得に思える。ただ、好きな作曲家やアーティストの名盤が数 10 枚一気に集められる半面、戦前の SP レコードや戦後の EP レコード（7 インチ盤、シングル盤ともいう）のように 1 曲 5 分程度の小品を集中して聴くという聴き方は失われてしまったような気がする。そこで筆者が最近注目しているのが EP レコードである。片面の収録時間はせいぜい 10 分程度。両面でも 20

分。この直径 7 インチの小さなレコードは 500 円程度だったので、昭和 50 年代に少年時代を過ごした筆者の小遣いでも気楽に買えた。筆者が初めて買ったクラシックのレコードは、この 7 インチ盤によるスッペの《軽騎兵》序曲だった。

EP レコードの長さに合う名曲もたくさん存在し、ヨハン・シュトラウスのワルツなどその最たるものだったが、当時シュトラウス以上に親しまれたのがルーマニア出身の作曲家ヨシフ・イヴァノヴィチ（1845～1902）による《ドナウ河のさざなみ》である。イ短調の哀愁を帯びた美しい旋律が印象的な情緒豊かなワルツで、ドヴォルザークの《家路》とともに小学校の放課後によく流れていたものである。欧米でも 20 世紀の変わり目の頃に大ヒットし、戦前はベルリン・フィルによる録音もあったし、1960 年頃までは盛んに演奏・録音されたが、ここ最近新録音の話全く聞かないのは、時代の流行だけではなく、録音フォーマットの長時間化も遠因になっているのだろう。筆者は、誰かがウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでこ

のワルツを取り上げ、作品リバイバルの狼煙を上げてくれないかとひそかに期待しているのである。

●イヴァノヴィチ：《ドナウ河のさざなみ》●ケテルビー：《ペルシャの市場にて》

アーサー・フィードラー指揮 ポストン・ポップス管弦楽団

[ビクター EP3032 (EP)] 廃盤

(写真：前ページ)

1950年代モノラル録音。EPレコードで最も親しまれたのはこの盤だろう。テンポは速く、リズムは歯切れよく、楽器の響きは輝かしい。フィードラーは1960年にステレオで再録音しており、この方は現在もCDで聴くことができる(RCA BVCC-37628)。



●イヴァノヴィチ：《ドナウ河のさざなみ》●シュトラウス：《美しく青きドナウ》
パウル・ワルター指揮 ウィーン交響楽団

[フォンタナ SFON1502] (写真 右上)

1959年ステレオ録音。序奏の溶けてしまいそうなクラリネット、おずおずと導かれるワルツ、立体的なリズム、そしてオランダの風景画のような色彩が美しい。フィードラー盤にはない対旋律が入っている。A面が《ドナウ河のさざなみ》になっていることにもご注目を。何度かCD化されたが現在は廃盤(ユニバーサル PHCP-20426)。

.....
【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」(アルファベータ)を上梓。



ハイブリッドオーケストラの現状紹介（１） —昭和音楽大学の合奏（管分奏）講座の事例—

研究：阿方 俊

ハイブリッドカーという言葉は、テレビや新聞で目にしない日はない。このハイブリッドの意味は、異種混合ということで、ここではガソリンエンジンと電気モーターを搭載した燃費効率がよく、環境にやさしい未来型の車のことを指している。しかしハイブリッドオーケストラ^(注-1)といっても、ハイブリッドカーと違ってそのイメージが頭に浮かんでくる人は多くはない。一般的にハイブリッドオーケストラとは、ピアノやヴァイオリンなどアコースティック楽器（生楽器）と電子楽器という異種の楽器の組み合わせによるアンサンブルを呼ぶ。一口にハイブリッドオーケストラといってもその形態はいろいろあるが、ここでは、昭和音楽大学の電子オルガン第11回定期演奏会（11月26日、ユリホール）で注目されたハイブリッドオーケストラの事例を紹介したい。



写真左の定期演奏会に出演したハイブリッドオーケストラのメンバーは、合奏（管分奏）という講座の受講生である。

この講座について、日本電子キーボード音楽学会第5回大会における研究発表「ハイブリッドオーケストラの現状と課題」（佐々木果奈）のレジュメで、その目的と学習レパートリーについて次のように記している。

講座の目的は、一部の音楽大学を除いて通常の音楽大学では、管打楽器専攻の学生に対して弦楽器専攻の学生が少なく、管打楽器の多くの学生がバランスの取れたオーケストラに属することができない。そこで電子オルガンが弦楽器パートとして参加するハイブリッドオーケストラにより、伝統的オーケストラ作品を経験させることにある。講座は2007年度開講された。

講座が軌道に乗った3年目の2009年度には、次の曲が取り上げられている。

- ・ 交響曲として、チャイコフスキー「第4番」、ベートーヴェン「第6番（田園）」、メンデルスゾーン「第4番（イタリア）」、ドボルザーク「第9番（新世界）」
- ・ 序曲や前奏曲として、ベートーヴェン「レオノーレ序曲第3番」、ウェーバー「魔弾の射手序曲」ワーグナー「マイスタージンガー第1幕への前奏曲」
- ・ その他、ラヴェル「ボレロ」、ビゼー「アルルの女 第2組曲」、ハチャトゥリアン「ガイヌ組曲」、プロコフィエフ「ロメオとジュリエットから」、ドリーブ「コッペリア」 *コッペリアは短大部バレエコースの卒業公演で演奏

注 - 1 筆者が使いはじめた造語で2002年度の昭和音楽大学研究紀要 No. 22（46ページ）で用いた。電子オルガンアンサンブルとハイブリッドオーケストラの違いに言及

この講座開講に関わった太田茂准教授は、その必要性について“音大に入学してくる管打楽器の学生の大半は、中学や高校で吹奏楽を経験してくるが、そこでのレパートリーのほとんどが編曲作品かオリジナル作品であり、オーケストラの古典派やロマン派の作品の演奏経験は非常に少ない。しかし音大でプロを目指して勉強するのであれば、古典派やロマン派の作品抜きでは片手落ちになる。そこでバーチャルなサウンドではあるが、電子オルガンや弦楽器として用いるハイブリッドオーケストラの採用に踏み切り、通常のオーケストラのレパートリーを勉強することができるようになった。また共演する電子オルガン専攻生にとっても、アコースティック楽器とのアンサンブル体験ができるというメリットも生まれた”と語っている。

また最近では、一昔前に比べて子どもがヴァイオリンを抱えて歩いている姿を見かけることが少なくなり、それとは逆に中学や高校でのブラスバンドの話題はよく耳にするようになった。この弦楽器学習者の減少と管打楽器学習者の増大という社会現象は、音大への管打楽器専攻の学生が極端に多い時代を作ってしまった。であれば「音楽の歴史は楽器の歴史である」という観点、すなわち音楽の歴史は、各時代の最先端の楽器とともに歩んできたことからして、現代のハイテクノロジー楽器である電子楽器とアコースティック楽器を共生させた次世代を指向したハイブリッド的考え方が出てくるのも時代趨勢の下で当然のことといえよう。

このところ韓国や中国でも少しずつではあるがハイブリッドオーケストラの演奏形態に興味をもち、実績を示しはじめた団体が現れてきている。



写真左はフィンランドの演奏。
写真上は公開セミナー。左端は筆者
右端は太田茂准教授

上の写真は、この連載-2 で取り上げた「広州国際電子キーボードアーツフェスティバル」を主催した星海音楽学院の学生による演奏風景である。ここでは、ハイブリッドオーケストラの経験豊かな太田准教授が指導と指揮を担当し、公開ワークショップで情報交換を行ない国際交流の一翼を担った。

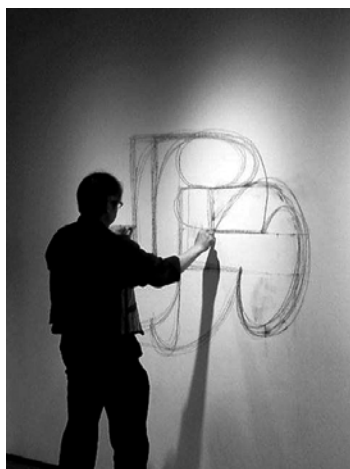
この連載では、韓国室内オペラ団および浜松学芸高等学校のハイブリッドオーケストラによるオペラへの取り組みの事例を順次紹介していきたい。

(あがた・しゅん 本研究会員)



年が明けて 2014 年となった。昨年の 11 月 23 日にトーキョーワンダーサイト渋谷にてトーキョー・エキスペリメンタル・フェスティバル Vol.8 (以下、TEF Vol.8) 登崎榮一×小西徹郎 BCD Sound Performance を行い、無事終了したことをお知らせしたい。このフェスティバルの公募プログラムに応募して審査の結果、採択され公演を行った。主催は公益財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト、後援は東京ドイツ文化センター、ポーランド広報文化センター及び、この BCD Sound Performance の公演については日本音楽舞踊会議、八王子音楽院、(社) Wasabi Music Entertainment. に後援していただいた。パフォーマンスのチケットの予約状況はすこぶる良く、当日の会場は満員となった。ご来場いただいたお客様には心より感謝している。

同期間、隣のスペースではスタンフォード大学 助教でポーランド人のヤロスワフ・カプシチンスキー氏のピアノと映像によるインスタレーション「Where is Chopin?」が行われており、たとえ、音楽のことを知らなくても、映像と自動演奏の作曲やピアノ演奏と映像の仕掛けを知らなくても鑑賞を楽しめる。とてもポエティックで場の空間の中の「空間的な一言一言」が美しく、ストーリー展開などなくても、その瞬間瞬間にしか存在しない美しさを感じる素晴らしい展示であった。



この B C D Sound Performance は昨年の福島現代美術ビエンナーレ 2012 “SORA” に続いて 2 度目のお披露目となった。今回はメルボルン大学フェローの登崎榮一氏も来日し、トーキョーワンダーサイト青山のレジデンスに滞在しながら展示やパフォーマンスの準備やリハーサルを行った。このパフォーマンスの内容は「オーストラリアのスティーブ・アダム氏の開発したコンピューター遠隔両手入力装置を使用し、登崎氏によるリアルタイムの BCD ドローイングは、アルゴリズム変換された音源を伴ったプロジェクション映像となる。その身体・映像・音源に、小西は BCD スト

ラクチャー分析に基づく作曲をトリガーとし、トランペットの即興演奏をリアルタイムで重ねる。」というものだ。このリアルプロジェクションに重なる映像は海外からの招聘も数多い、信藤薫氏が制作した。登崎氏の空中での B C D ドローイングをあらかじめ分析した上でトランペット演奏を重ねていくのだが、演奏は結果としてドローイングの動きとは異なる方向を持った直感的で生々しい演奏になったことが非常に面白く、お客様にとっても楽しんでいただけたのではと思う。この本番の直前に私は路上にて墜落して瀕死の鷹に出会った。彼(鷹)はもう間もなく死ぬ。死の直前にみせるすごい形相と呼吸しようとするしぐさは生物の生への欲求と最後の力を感じた。生き物は「必死」を悟ったときに同時に苦しみを全身で味わい生き

よう生きようとする、魂は肉体に宿っているときには身体の細部にまで宿り支配されているが、魂が肉体を抜けたときにやっと自由になれるのだな、とそんなことを瀕死の彼から学んだ。そんなことがあっての本番であったからか、混沌としながらも非常にクリアな演奏、音楽になったのだと思う。



会場には音楽業界の方々や現代アートに関係者、また尊敬している著名人の方々もご来場くださった。また、大学時代の友人も来てくれて20年以上ぶりの再会を果たした。今回はプレスも入り、管楽器マガジン「ブラストライブ」にも”管楽器奏者が現代アートに挑む”という内容の記事として取り上げられることになった。ご来場くださったお客様の中で、昨年の福島現代美術ビエンナーレのパフォーマンスの際、映像の中にてご参加くださった元西武美術館アドバイザーで草間彌生氏を発掘し、オノ・ヨーコ氏とも親交の深い、小山朱鷺子様がいらっしゃり、終演後、次の言葉を私にくださった。

「今日、私は生まれて初めての体験をしました。あなたの音楽を聴いていると、縄文のときに引き戻されて私の内臓が空っぽになって皮膚の外側と裏側だけであなたの音楽を感じていました。こんなことは生まれて初めてです。」

私はとてもうれしく、光栄に思った。私ごときには誠に勿体無いお言葉であった。心より感謝の至りである。昨年の福島現代美術ビエンナーレではお会いできなかったが今回こうしてお会いできてお話ができたことはとてもうれしく、とても良き思い出となるだろうしこれからの私のアーティスト人生において心の糧となるだろう。



今回、最初の書類審査の際、結構な量の書類を送った。きっと仕分けするスタッフの方々や審査員の先生方にはやや厄介な応募者であっただろう。最終審査のプレゼンテーションでは、私はものすごく緊張していた。普段、しゃべる仕事をしているにもかかわらずにだ。ただでさえ汗かきなのにこの日は更に緊張で汗だくであった。それでも採択してくださった審査員の先生方には心から感謝している。また、公演日が決まりトーキョーワンダーサイトの皆様とは密に連絡を取り合い、展示から本番当日、そして一番大変な撤収までたくさんのフォローをしてくださった。彼らがいなければこの公演は実行できなかったであろう。本当に心から感謝している。また機会あらばこういう大きな公募にもチャレンジし、どんどん広げていきたいと願っている。

(こにし・てつろう 本会理事)

タイトルの挿絵：前川久美子 まえかわ くみこ (山口芸術短期大学在学中)

《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

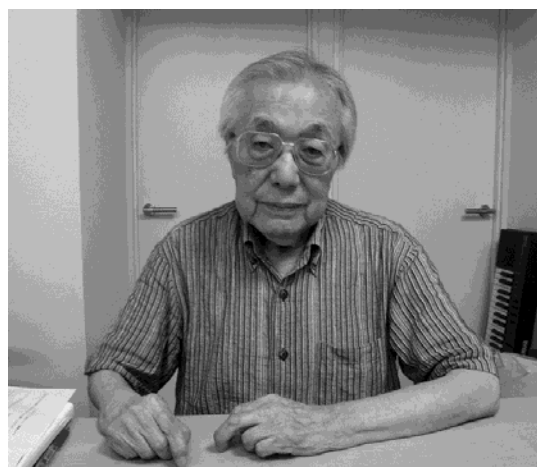
第九回 渡辺宙明 劇伴人生 〜ヒーローと伴(ともに)に (4)〜

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

九回目は、今年米寿を迎えた作曲家、渡辺宙明氏。前回は、2008年10月。その後5年が過ぎ現在御年88歳。インタビュー以降今現在の心境も変化しつつあるという。今も現役で活躍される渡辺宙明氏の米寿を記念し、2008年対談内容掲載のほかに、この5年間の思いを語っていただくべく再インタビュー。新たな気持ちでお届けします。

■渡辺宙明（わたなべ・ちゅうめい /作曲家）

本名、わたなべ みちあき（漢字同じ）：作曲家・編曲家。1925年愛知県生まれ。東京大学文学部心理学科卒業。團伊玖磨、諸井三郎、渡辺貞夫の各氏に師事。卒業後、日本初の民放ラジオ曲、中部日本放送（CBC）にてラジオドラマ「アトムボーイ」でプロデビュー。その後上京、映画・TVドラマ等、多くの音楽を手がける。代表作に「人造人間キカイダー（1972）」「マジンガーZ（1972）」「秘密戦隊ゴレンジャー（1975）」「太陽戦隊サンバルカン（1981）」「宇宙刑事ギャバン（1982）」、の音楽など主題歌、挿入歌、BGM等多数。近作では「海賊戦隊ゴーカイジャーVS 宇宙刑事ギャバン THE MOVIE（2012/山下康介との共作）」等がある。



■橘川 琢（作曲家・日本音楽舞踊会議理事）

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派（「音楽現代」誌）』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。



■特撮映画の開拓、確立。そしてメロディについて

——1972年からテレビの中でもアクションヒーロー・特撮物が入ってきますが、そのきっかけはどういったところからでしょうか？

「劇場映画、CM、記録映画とか大人の劇場用にこだわったら仕事がだんだん減ってきて。知っているディレクターも管理職に行っちゃって現場に出なくなって、仕事に詰まってきた。TVドラマの音楽なども若い人にとって代わられてゆく。

そこで他にないだろうかと東映のプロデューサーに聞いたら、S F ものがあると。それが『人造人間キカイダー(1972)』だったんです。最初は子ども向けだからとためらって口にしたら『なにってんだい、子どものものもいいんだよ!』と説かれた。それが運命の転機になって、いつの間にか専門家になっちゃった。時代が求めていたのもあったんでしょね。上手くいったから次に来たのが『マジンガーZ(1972)』。」

———その後のご活躍を思いますと、まさに天職との出会いですね。

「すごい反響があったんですよ。もう一生懸命取り組んだ。特撮アクションドラマはどうやったらいいかなあと、アクション風な音楽を自分で研究して、メロディの音形とかリズム、パターンを研究しました。ロックの音階は日本の民謡音階に似ていると思い、受けること間違いなしと確信を持って使用しました。さらにブルーノートを使ったり。

あのとき丁度渡辺貞夫さんにバークリーのジャズ理論を習ったばかりでしたから。習ったのは昭和42-3年ごろね。丁度その少し前にバークリーから渡辺貞夫さんが帰ってきて自宅で教えていて、教わることができました。こんなにすごい理論があるのかと感激してね。でもジャズのハーモニーをあんまり使いすぎると大衆から遊離し過ぎるからほどほどに使うと。

ジャズのコードは実際の作曲ではたくさん使っていないにしても、参考になる。和音を作るに際してスケールの中でどの音が使えるかどうかとか。同じメロディに色々なハーモニーがつけられる。そういえばナベサダさんも移動ドで説明されていましたね。」

———先生はかねてから移動ド、相対音感の考え方を推奨していらっしゃるんですね。メロディの創り方にも大きな影響があるとお聞きしましたが・・・。

「音程というのが大事で、階名でないといいメロディが書けないんです。音程感覚がメロディの発想にとって重要です。今の日本の音楽教育では音名唱法つまり固定ドが中心になっていますが、欧米ではイタリー、フランスを除いては移動ドが中心になっているようですね。いいメロディを書くためには、階名唱法を学ぶ必要があります。いいメロディのコツがつかめます。無調音楽を歌うとか伴奏無しで歌い始めるときは絶対音感があるといい点はあるけど、相対音感は持っていなくちゃいけない。メロディメーカーはみんなそうです。」

———宙明節といわれるメロディは、多くの研究成果によって生まれていたのですね。リズムカルでパンチの効いた血沸き肉踊る宙明サウンドだけでなく、独特の憂いあるメロディにも、熱心なファンが多いですね。

「僕自身は抒情的な音楽が好きでね。美しいメロディを書きたい。しかしアクション物の強いシンコペーションも好き。もともと美しい旋律、抒情的な曲が一番得意な領域だったですね。なだらかなメロディの次に・・・ダダッ、ダダッ、ティヤタター！という感じにね。もちろん向こうから求められるのに、応えたい気持ちもありましたけど。」



——（目の前の、宙明先生の歌声に圧倒されつつ）確かに両方混じっていますね！！

■メロディ論外伝・・・メロディの難しさ。言葉と共存し合うメロディとは。

——わたくしごとで恐縮ですけど、詩と音楽をテーマに朗読（詩唱）と歌、器楽演奏を交えた「詩歌曲」というジャンルを2007年に創造し、その形式で発表する機会が多くありました。そこで物語性の強い朗読の時には、旋律が重なりすぎると相殺しあってしまう危険があり、共存関係に気をつけています。

何かを抑え気味にしたり、間を縫うようにならませたり、敢えて意味を感じさせない曲を背景にしてみたり・・・。他にも全体のテーマをにおわせる場面以外ではメロディを抑えめにしたり、旋律を抜いた伴奏だけにしたりして色々考えてはいるのですが、いまだに難しさを感じます。

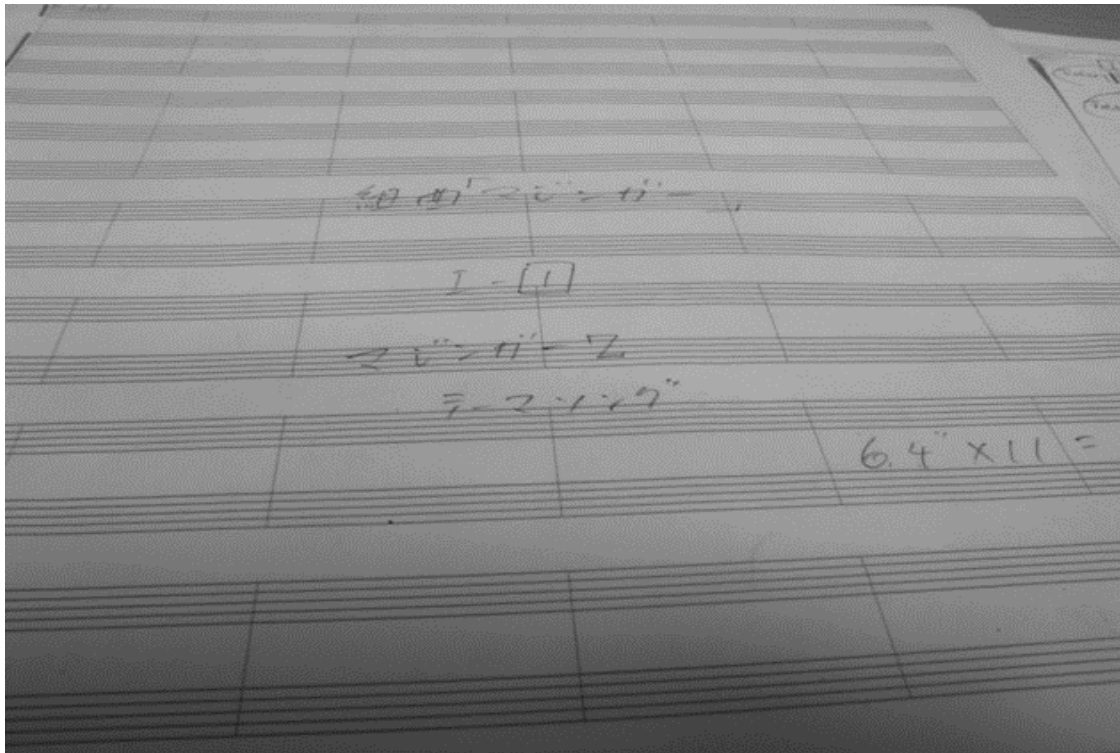
「ええ、詩と音楽ではね、これは確かに難しい。映像がある場合よりは易いでしょうけど、難しいものがあるでしょうね。あんまり音楽が歌いすぎるとね、詩とちよっとずれちゃうことがあるかも知れないね。抑え気味のメロディのほうが良いという場面があるでしょうね。」

——なるほど、（詩の朗読の入らない）普通の演奏会の舞台上でやったら少し抑え気味かな？という感じのメロディのほうが、朗読などと重ねると良い時も。

「そう。メロディを渋くするとかね。」

■クールジャパン、ファンとの交流

——話は戻りますが、先生の曲の海外での反響はいかがでしょうか？いま、海外では日本の文化やテレビコンテンツが流行し、一昔前はジャパニメーション（ジャパン＋アニメーション）、今はクール・ジャパンという枠で海外でも注目をされていると思います。その辺り先生の思うところや、先生の曲に対する反応はいかがでしょうか？



「海外での日本のアニメ、特撮に対する人気は絶大なものがあるようです。日本では想像できないほどですよ。日本の歌手がブラジルへ歌いに行く場合、空港のロビーに大勢のファンが出迎えに来ていて、私の曲を日本語で歌いだす。空港の職員まで歌っているそうです。リオの国立大学の日本語科には、日本のアニメを研究したくて入学する人も多いという記事を読んだことがあります。私自身、先日、ニューヨークのラジオ局から、ラジオインタビューの依頼を受けました。私にとっては、驚きでもあり、喜びでもありました。」

———また先生の曲は、往年のファン、そして歌を聴いてファンになった若い人たちが大勢います。創作者として、励まし励まされのご関係もあったかと思います。その人たちにメッセージがありましたらぜひお願い致します。

「私の曲を聞いて育ち、中には、それらの曲に励まされて活力を得たという人もおられるようで、そのような話を聞くと嬉しいです。多くの皆さんから支持を受けてきたことは、私にとっての生きがいでもあります。また、主題歌だけでなく、挿入歌、BGM も聴いて欲しいですね。美しい曲、楽しい曲もありますし、迫力ある BGM もあります。」

※次回は最終回。日本人のための曲、日本人のメロディを・・・渡辺宙明創作論をお送りいたします。

(インタビュー 於：2013年9月6日 渡辺宙明邸にて)

(公社) 日本尺八連盟

第38回全国尺八コンクール見聞録

中尾都山を流祖とする、都山流の流れを汲む奏者が集結した組織である日本尺八連盟が、今年で第38回を迎えるコンクールの最終決戦を、12月8日本部がある京都市で開催した。

独奏部門とアンサンブル部門の決戦地となった会場は、京都市男女共同参画センターホール（ウイングス京都ホール）で、全国各地で選り抜かれた優秀な奏者が京都に集結して、その腕前を披露し競い合った。

審査委員は、会長の坂田誠山氏、副会長の永田憲山氏、久保田敏子氏（京都市立芸術大学名誉教授）、技能研究専門委員の柴田旺山氏と高橋雅光（作曲）で審査にあたった。（司会進行は副会長池内修山氏）

このコンクールは、応募者が師範（先生・講師）、大師範（先生を指導する講師）、竹帥（竹を統括する最高位）の方々が多く、長年修業をされてきた方々が、さらに目標を持って精進されるためのコンクールである。

今回の応募参加者の平均年齢は61歳で、受賞は三位までだが、独奏部門第一位になられた方は、埼玉県支部の64歳になられる山田俊山氏。アンサンブル部門第一位は三重県支部の市田津山氏（71歳）・北川裕山氏（71歳）で、市田氏・北川氏組は、再挑戦を繰り返し、今回見事その栄冠を勝ち得た。その執着心・向上心には敬意を表したい。第一位になられた方々には、文部科学大臣賞及び副賞も合わせて授与された。

応募参加者は、それぞれの地方で選り抜かれた優秀な方々なので、会長の坂田誠山氏が話されるように、地元に戻りその栄誉を知らせ、子供から大人まで、一般に方々にも育成指導を行い、そのレベルの高さを持って、尺八及び尺八音楽の普及に努められることを期待する。

近年日本尺八連盟は、このコンクール以外の主な活動として、会長の坂田氏が、東北大震災後被災者のためのコンサートを宮城県石巻市で行い、当地の中学校2校へ尺八120本を寄贈したり、東京文化会館の大ホールを超満員の盛況でコンサートを行ったりした。また、各支部でも演奏会を活発に行うなど、コンサートや活動の主なものには、連盟本部が中心となって後押しをしている。

今後、世界各国での演奏経験が豊富な会長の坂田誠山氏がいう、国内の尺八及び尺八音楽の普及はもとより、外国との交歓演奏交流を通じ、「尺八楽」を高め、海外にも日本の音楽文化として広めて頂ことを希望する。（高橋雅光）

会と会員の情報

CMDJ 会と会員のスケジュール

2014年

1 月

7日(火)日本音楽舞踊会議 理事会【16:00~17:30 事務所】

7日(火)日本音楽舞踊会議 2014年新年会

【会場：「くいたいもん」高田馬場店 場所：JR高田馬場駅戸山口改札横 時間：18:00~20:00 会費4,500円】

17日(金) 『音楽の世界』編集会議 会事務所 19:00~

18日(土) 深沢亮子 (Pf.) 共演：瀬川祥子 (Vn.) 水谷川優子 (Vc.)

モーツァルト ピアノとVnのためのソナタ e moll K.304

シューベルト アルペジオーネ・ソナタ a moll D-821

シューベルト ピアノ・トリオ No1 B-Dur D-809

【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター16:00

問合せ：朝日カルチャーセンター03-3344-1945】

19日(日)橘川琢作曲：クラリネットとピアノによる「Sakura」~TOKYO TO

NEWYORK 東京とニューヨーク 2014プロジェクト採択作品~/演

奏 THOMAS PIERCY (Cl) 田中美香 (Pf) 【石森楽器/日本公演

3,000円 15:00開演 問い合わせ TONADAPRODUCTIONS】

19日(日) 声楽部会公演「2014年 新春に歌う~夢と希望と、そして・・・」

【すみだトリフォニー小ホール 14:00】

2 月

7日(金)日本音楽舞踊会議 理事会【19:00~21:00 事務所】

7日(金) 助川敏弥(作曲) 新作合唱曲初演 日本合唱協会委嘱作品

混声合唱曲「はるかなる とき へ」「ちいさき いのちの ために」合唱版

【東京文化会館小ホール 18:30開演】

11日(火・祝) 日本音楽舞踊会議第52期定期総会

【新宿文化センター4F 第2会議室 13:15~16:40】

16日(日) 『音楽の世界』編集会議(暫定スケジュール) 会事務所 14:00~

3 月

7日(金)日本音楽舞踊会議 理事会【19:00~21:00 事務所】

9日(日) 深沢亮子ー レクチャーコンサート Mozart と Wien

【スタジオ・コンツェルティーノ 問合せ：042-729-4698】

10日(月) 邦楽部会コンサート(仮称)【すみだトリフォニー小ホール(詳細企画中)】

14 日(金) 『音楽の世界』編集会議(暫定スケジュール) 会事務所 19:00～

15 日(土)並木桂子(pf.)ー春のふれあいコンサート 共演：根岸一郎(Bar.)

フォーレ：夢のあとに、山田耕筰：この道、服部良一：蘇州夜曲、他

【北浦和公民館 14:00 開演 入場無料(要、整理券)】

主催・お問合せ：北浦和公民館 048-832-3139

25 日(火) 第 6 回フランス歌曲研究コンサート

～アーンとプーランクの歌曲を中心に～

【中目黒 GT プラザホール 18:30 開演】

28 日(金) 深沢亮子ー 共演:エール・カルテット Dvorjak ピアノ五重奏曲

【久米美術館 18:00 問合せ：日唄協会 03-3468-1244】

4 月

7 日(月)日本音楽舞踊会議 理事会【19:00～21:00 事務所】

10 日(金)フレッシュコンサート 2014【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

20 日(日) 並木桂子(pf.)ートリオで楽しむモーッアルト の調べ(仮題)

共演：印田千裕(Vn.)、印田洋介(Vc.)モーッアルト：ピアノトリオ ハ長調 k548、

ト短調 k564. Vn. と Pf. の爲の 6 つの変奏曲 ト短調 k360 他【光が丘美術館 14:00 開演 主催・お問合せ：日本モーッアルト愛好会(代表 宮田宗雄)】

5 月

7 日(月)日本音楽舞踊会議 理事会【19:00～21:00 事務所】

26 日(月) 作曲部会公演 【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

6 月

7 日(土)日本音楽舞踊会議 理事会【19:00～21:00 事務所】

13 日(金) ピアノ部会公演【オペラシティリサイタルホール(詳細未定)】

27 日(金)COMPOSITIONS 2014 【ヤマハエレクトーンシティ渋谷メインホール 19:00 開演 当日券 3,000 円】

(出品者募集中です。連絡先：実行委員長 西山淑子 03-3955-6249)

7 月

6 日(日) 日本尺八連盟埼玉支部第 37 回定期演奏会

高橋雅光作曲 尺八・箏・十七絃による大合奏曲「筑後川詩情」(箏・十七絃=柴田つぐみ社中) 【川越市メルトホール 14:00 開演 一般 3,000 円】

7 日(月) 声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」

【すみだトリフォニー小ホール昼間公演(詳細未定)】

9 月

12 日(金) 深沢亮子 ウィーンの音楽家と共に

共演：C エーレンフェルナー (vn) H. ミュラー (va) 他

【浜離宮朝日ホール 19:00 問い合わせ新演奏家(03-3561-5012)】

25 日(木) CMDJ2014 オペラコンサート【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

10 月

23 日(木) 20 世紀以降の音楽とその潮流 “様々な音の風景 XI”

【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

会員のみなさまへ

ご案内 上記スケジュールにゴシック体で記載されている本会主催事業には、会員・青年会員・準会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料または会員割引料金でご入場頂けます。

スケジュール原稿募集 会員の皆様の活動予定を無料掲載させていただきます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務局までメールまたは Fax でお知らせ下さい。

○お知らせの際は、①〇月〇日(曜日) ②会員名 ③催し物(出版物等)名 ④メインプログラム一曲名、もしくは公演・講演の内容を一つ ⑤【開催場所】、開演時間、入場券価格、等の順番でお書きください。

会員スケジュールの表示(凡例)について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催(含む、各部会主催)公演予定です。

明朝体文字は会員から寄せられた情報、会関係者が企画、参加して居る事業や公演の情報です。

明朝体太文字は、本会の運営に関わる会議等の予定です。

※「会員から寄せられた情報」等は原文に準じますが、文字数の制限上、項目内容等を変更する場合があります事をお断りします。

新年会のご案内

日本音楽舞踊会議 2014 年 新年会

【日時】2014 年 1 月 7 日(火) 18:00~20:00

【会場】**くいたいもん**

【会費】4,500 円

会場住所：東京都新宿区高田馬場 4-3-12

アルク高田馬場 2F

電話：03-5338-4140

アクセスについては右の地図をご参照ください。



編集後記

明けましておめでとうございます。『音楽の世界』新年号が届く頃には皆様は帰省して郷里で、あるいは今のお住まいで新年を迎えられていることと思います。ご存知の通り 2014 年の今年の干支は午(馬)です。良い年であって欲しいと願っていますが、先のことは判りません。しかし干支に相応しく、勇気をもって前に向かって疾走してみたいと思っています。しかし、前に向かってひたすら走るだけでなく、時には立ち止まり、冷静に世の中や自分自身を見つめることも必要かもしれません。

ところで、1 月 7 日には新年恒例の日本音楽舞踊会議新年会が高田の馬場の「くいたいもん」で催されます。会員の方々もちろん、そのご家族、友人、そして読者の方々も自由に参加出来ますので、多くの方々にお集まりいただくことを期待しています。新年会の席で楽しく飲んで、食べて、語り合って、この一年間走り続けるための気力を蓄えようではありませんか。

編集長：中島洋一

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌7thセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢 高橋 通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦 富美 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光

戸引小夜子 北條直彦

音楽の世界 1 月号(通巻 555 号)

2014 年 1 月 1 日発行 定価 500 円(本体 476 円)

発行人：芙二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169 - 0075 東京都新宿区高田馬場 4 - 1 - 6 寿美ビル 305 Tel/Fax: (03) 3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03) 3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04) 7185 0471

購読料 年間: 5000 円 (6 ヶ月: 2500 円) 振替 00110 - 4 - 65140 (日本音楽舞踊会議)

* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします